

愛媛県宇和島市の方言文末詞

中川 寛之

第1章 はじめに

私たちは日常生活における他者とのコミュニケーション活動で何気なくその土地特有の言葉や表現、すなわち「方言」を使用している。しかし、同一地域内の方言でも現在の高年層と若年層とでは使用されているものが異なるという認識を持つ人は少なからずいるのではないかだろうか。それは語彙であったり、文法形式であったり様々なことに通じて言えることである。

本稿は多様な文法形式の中でも、方言として使用される文末詞（「終助詞」・「文末助詞」などの名称があるが、本稿では「文末詞」という用語に統一して記述する。「文末詞」という用語については2章で詳述）について述べるものである。試みに、筆者¹の出身地である愛媛県宇和島市で使用される方言文末詞を使用した例文をいくつか挙げてみよう。なお、本稿で示す例文は基本的に宇和島市方言で示すこととし、出典を明記していないものは全て筆者の作例あるいは観察に基づいて得られた用例である。以降方言文末詞をカタカナで、それ以外（共通語の文末詞や文末詞以外の方言形式も含む）は漢字仮名交じりで示し、注目すべき箇所には適宜傍線を付す。

- (1) (帰宅した家族に夕飯を食べるよう勧めるとき)
おかげり。ご飯食べさいヤ。（「食べさい」は「食べろ」の方言形）
- (2) (電話するように頼まれて返事をするとき)
分かった。この用事が終わったら電話すライ。
- (3) (何度もしつこく起こされて苛立ちながら返事をするとき)
うるさいな。そんなに言われんでも、起きるテヤ。
- (4) (入学試験ぐらい突破できるだろうと確信していることを言うとき)
試験ぐらい通らいジャイ。（武智正人（1957））

これらの文末詞を眺めてみると、当該地域の方言話者でなくとも何となく意味を理解することができるものもあれば、共通語には相当する形式がなく理解することが難しい文末詞もあるだろう。

陣内正敬・友定賢治（編）（2005）によると、「高度経済成長期を境に、方言が共通語に取り替えられる共通語化の時代は終わり、今は方言と共通語を使い分ける時代という認識である」とある。確かに筆者自身の内省に基づいても、高年層話者が使用する方言形式の代わりに若年層は共通語を使用しているということはある。一方で、共通語に取って代わられず、既存の方言形式をそのまま使用する場合もある。本稿で取り上げる文末詞にも同じことが言え、共通語に取って代わられたと見られるものもあれば、現在でも既存の方言文末詞が使用されることがある。ただし、既存の方言文末詞を使用すると言っても、必ずしも高年層と若年層とで用法が同一であるというわけではない。そこで、本稿では高年層と若年層とが共通して使用する宇和島市の方言文末詞「テヤ」に焦点を当て、世代ごとにどのような用法差があるのか、またなぜそのような用法差が生じるのかということを明らかにしていく。

本研究を進めるにあたって重視した方針を簡単に述べる。従来、方言文末詞の記述法としては「強調」・「苛立ち」などの曖昧な言葉で説明されていることが多い、なぜそのような印象を受けるのか、また文法的・文脈的な観点から見て文末詞自体の意味用法や意味機能がどういったものなのかということが詳細に記述されることは一部の先行研究²を除いてあまり見られなかった。本稿では文法的・文脈的な観点から宇和島市の方言文末詞を記述し、非母語話者にとっても理解することができるような説明を行うことを目指す。さらに、このような観点に立っている先行研究でも執筆者自身の内省に基づいた記述のみに留まっているのが現状である。そのため、本稿では筆者の内省に基づいた文法記述を充実させつつ、現地でのフィールドワークも並行して行い、今現在どのように方言文末詞が運用されているのかという実態を実証可能な形で描くことを志向している。

さて、本稿の構成は以下のとおりである。まず、2章では「文末詞」という用語を使用する理由や宇和島市方言の概観など本研究の枠組みとなる部分について述べる。3章では「テヤ」の形式的特徴、特に生起する文タイプに生じる世代差を中心に記述する。4章では「テヤ」の意味用法について筆者の内省に基づいて記述した後、各意味用法の使用の可否に生じる世代差について言及する。5章では「テヤ」に生起する文タイプに生じる世代差の要因を、6章では「テヤ」の一部の意味用法の使用の可否に生じる世代差の要因をそれぞれ考察する。7章で本稿のまとめと今後の展望を述べる。

第2章 研究の枠組み

本章では、本稿で使用する「文末詞」という用語について説明した後に、愛媛県の方言区画、さらに宇和島市で使用される方言文末詞の概観を行う。

2.1 「文末詞」という用語について

「文末詞」という用語・概念は方言研究者の藤原与一氏が提唱したもので、一般に学校文法などで使用される「終助詞」には含まれない形式も包摂する用語だと考えられる。以下に「文末詞」という用語を積極的に用いる藤原与一氏の主張を簡潔にまとめる。

【藤原与一氏の主張】

- （「終助詞」の名称をあげて）「終」という曖昧な表現ではなく、文末に現れることを明らかにした名称にしたい。
- （「文末詞」と呼ぶものは）直前に付接するものを助けるという助詞本来の意味機能とは異なり、文全体に影響を与えている。
- （「文末詞」と呼ぶものは）個々人によってアクセントや形が変化することがあり、これまで助詞と呼ばれているものとは一線を画している。

さらに、藤原与一氏は文末詞を「原生的文末詞」と「転成（転生）文末詞」の大きく二つに分類している（藤原与一（1982））。「原生的文末詞」は「すぐには転成を考えることができない類のもの」（藤原与一（1982））とされ、一般的に「終助詞」とされることが多い「よ」や「ね」などが含まれるとされる。一方で、「転成（転生）文末詞」には動詞や名詞など他品詞に由来し、一般的に「終助詞」とは見なされないようなものまで含まれている。

また、野田春美（2002）では「終助詞」のことを「文末に用いられる助詞」と定義しつつ、「どこまでを終助詞として認めるかについて、共通の認識があるわけではない」と指摘している。さらに、「よ」・「ぞ」・「ぜ」・「わ」・「き」・「ね（え）」・「な（あ）」を「終助詞として認めることにあまり問題がないもの」としているが、具体的になぜこれらは「終助詞」と認定するのにあまり問題がないのか十分に説明されているわけではない。

加えて、本稿の中心的な話題となる「テヤ」という方言形式は、後に詳しく述べるが「と言やあ」という発話の引用形式に由来するものだと考えられる。共通語では「ってば」も発話の引用形式「と言えば」に由来し、「テヤ」も共通語で言うならば「ってば」に相当すると思われるが、先行研究によても「ってば」を「終助詞」と認定するのかしないのか、はっきりとした立場を示しているものはあまり見られない³。「終助詞」や「文末詞」などの用語が混在していると混乱をきたすため、本稿では「終助詞」よりも広い概念を包摂する「文末詞」という用語を一貫して使用することとする。

2.2 愛媛県の方言区画

本稿で記述対象とする宇和島市方言は愛媛県の南部に位置する。愛媛県は県内を3つに区分したとき、東側から東予地方・中予地方・南予地方とそれぞれ呼ばれている。南予地方は南部の宇和島市を中心地としつつ、北から内子町・大洲市・八幡浜市・伊方町・西予市・鬼北町・宇和島市・松野町・愛南町の計9つの市と町から構成されている（図1参照）。

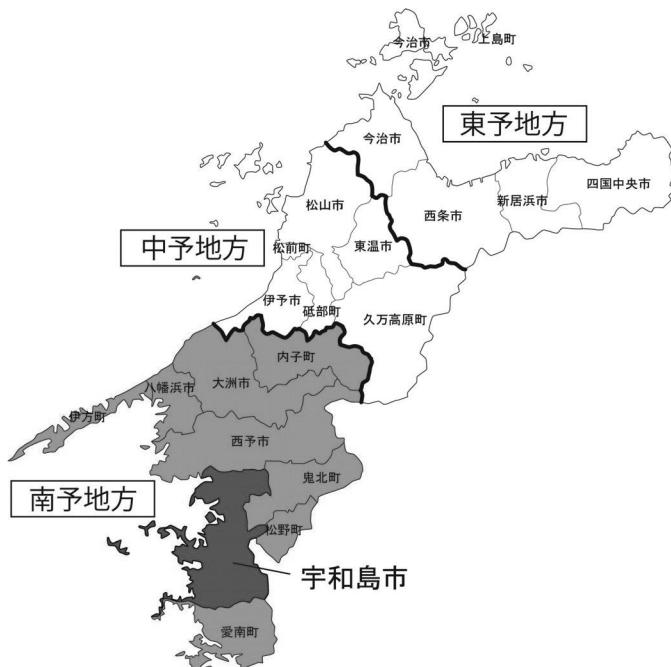


図1：愛媛県の区画図

愛媛県の方言について、高橋顕志（1992）では以下のように記述されており、愛媛県での使用される言葉は周辺地域の影響を強く受けていることが指摘されている。また、近年では愛媛県も他地域の例外でなく共通語化の影響を受けているようである。

最近の言語地理学的研究によると、東予地方は、東の県境から新居浜市付近まで、香川県・徳島県の言語形成が張り出して分布するものがあって、四国東部方言の存在を予想させたり、また、同じく東予地方で、川之江市から西条市の間、すなわち燧灘（ヒウチナダ）によって（彼の土佐湾の張り出しとともに）四国が大きくくびれている地域には、高知県の言語形成が張り出して分布するものもある。

さらに、西に長くのびる田岬半島だけでなく、八幡浜市・西宇和郡、宇和海島嶼部には、九州方言との接触を思わせる言語現象も散見される。

このように、方言において多彩な様相を示していたこの地域も、明治6（1873）年の愛媛県としての統一以来、県民性もあいまって、急激に県都「松山市」を中心とする中央集権化が進んだ。近年においては、松山市から放射状にのびる交通機関の飛躍

的な発達により、さらにその傾向は進んでいる。南予の北部地域、中山町・大洲市・五十崎町などは、中予文化圏への編入が意識上進行している。さらには、共通語の空からの伝播が、全県的に進み、その依って立つ言語基盤そのものが大きく統一されようとしている。

そして、杉山正世（1964）は愛媛県の方言区画を図2のように示している。

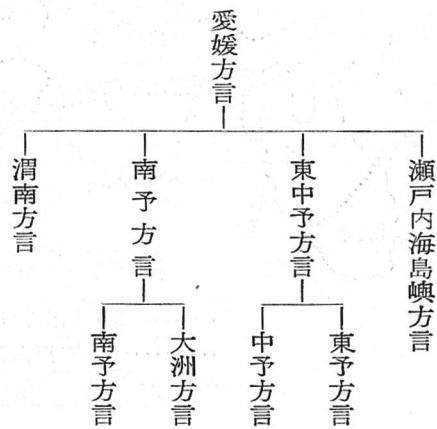


図2：愛媛県の方言区画図（杉山正世（1964）より抜粋）

杉山正世（1964）に従うと、本稿で扱う宇和島市方言は南予方言あるいは渭南方言に分類される。また、本稿では合併後の宇和島市を記述対象エリアとするため、旧吉田町や旧三間町なども宇和島市方言に含めて記述する。

2.3 宇和島市の方言文末詞の概観

本節では宇和島市の方言文末詞の概観を行うが、その前に記述対象を宇和島市方言とした理由を簡単に述べておく。

それは、筆者が言語形成期を過ごしたのが宇和島市（宇和島市吉田町）だからである。藤原与一（1986）では南予地方の方言として多様な文末詞が列挙されているが、同じ南予地方でも南部の宇和島市と北部の八幡浜市・大洲市などとでは、たとえ同じ形式の文末詞を使用していても用法面で差異が生じている（つまり、地域差がある）可能性がある。文末詞はそれ自体に具体的な意味が備わっている語彙とは異なり、文末詞の意味機能から様々な文脈上の意味が生じるため、まずは意味機能と意味用法を具体的に記述する必要がある。そのためには、記述対象とする文末詞の用例を数多く収集して、文法的な振る舞いを確認することはもちろん、文末詞を使用したことによって生じる発話態度の違いなどを考慮する必要があるが、当該方言の使用者でなければそこまで考慮することは容易ではない。以上の理由により、南予地方の中でも宇和島市方言を記述対象とした。

ここからは宇和島市の方言文末詞の概観を行う。その際、生起する文タイプという観点から、平叙文専用のもの・命令文専用のもの（勧誘文・禁止文を含む。文の形態を述べる際、本稿では「命令文」という用語を一貫して使用し、表現意図を述べる際は＜勧誘＞・＜命令＞・＜禁止＞と示す）・疑問文専用のもの・その他のものの4つに分類する。さらに、宇和島市方言の先行研究（国村三郎（1956）、武智正人（1957）、杉山正世（1959）、篠崎充男（1987）など）を参考にし、筆者の内省に基づいて現在の若年層が使用するものとそうでないもの（高年層が使用する可能性があるもの）とに分類した。すると、以下の表1のようになる⁴。なお、共通語の分類は小西いづみ（2016）を参考にし、「テヤ」と比較するため「ってば」のみ筆者が追加した。

表 1：宇和島市の方言文末詞一覧

	共通語	宇和島市方言(若)	宇和島市方言(高)
専用: 平叙文	わ、ぞ	ワ、ワイ、テヤ	ガ
専用: 命令文		ヤ	
専用: 疑問文	か	カ	カ、ラ
その他	さ、よ、ね、な、ぜ、ってば	ナ、ネ、ヨ、ゾ、デ(ゼ)	ナ、ネ、ノ、ヤ、ヨ、ワ イ、ゾ(ド)、デ(ゼ)、 テヤ(チヤ)、ジャイ

※（若）は若年層が使用すると思われるもの、（高）は高年層が使用すると思われるものである。全世代で使用されると思われるものは、両方の欄に記載した。

※斜線を引いた欄は該当する文末詞が存在しないと思われることを示す。

※命令文の欄には、意向形による命令文＜勧誘＞、命令形・テ形命令による命令文＜命令＞（宇和島市方言の欄には「～さい」という形式の命令形も含む）、禁止形による命令文＜禁止＞を含めている。

※「ぜ」は小西いづみ（2016）では平叙文の欄に記載されているが、意向形による命令文＜勧誘＞にも付加する（日本語記述文法研究会（編）（2003））ため、本稿ではその他の欄に記載した。

※括弧内の形式は当該文末詞の異形態だと思われるものである。

いよいよ宇和島市の方言文末詞の記述を行うが、まず筆者の内省に基づいて記述することが可能なものの（宇和島市方言（若）に記載したもの）を記述し、筆者の内省が及ばない文末詞（高年層のみが使用すると思われるもの）については先行研究の記述や用例を簡単にまとめる程度に留めることとする。

なお、例文の文法性判断は基本的に筆者の内省に基づいており、形態・統語的に不適格な場合は「*」を、文脈的に不適切なものは「#」を、容認しづらいものは「??」を、理解できるが使用しないものは「?」を付す。ただし、記号を付すのは筆者の作例や観察から得られた用例のみで、先行研究から引用するものについては記号を付さず、本文中に文法性判断の説明を加える。さらに、必要に応じて適宜共通語訳も付すがこれは近似的なもので、必ずしも文末詞が表す発話態度を十分に表現できているわけではない。

2.3.1 平叙文専用の文末詞

若年層には平叙文専用の文末詞として「ワ」・「ワイ」・「テヤ」がある。まずは、「ワ」・「ワイ」について述べる。

(5) (体調がすぐれず早めに寝ることを家族に伝えるとき)

ちょっとしんどいけん、今日はそろそろ寝る {ワ／ワイ}。(寝るよ)

(6) (先生に欠席連絡をするよう頼まれて返事をするとき)

分かった、先生に連絡しとく {ワ／ワイ}。(しておくよ)

「ワ」・「ワイ」については 6 章で詳述するため、ここでは簡単な記述に留めるが、宇和島市方言の「ワ」は野間純平（2011）で記述された大阪方言の「ワ」とほぼ一致する。すなわち、「ワ」の意味機能は「当該命題の内容が話し手がその場で考えたり知ったりしたことであり、それが話し手の領域にとどまっているということ」（野間純平（2011）を参照）を示す。ちなみに、宇和島市の高年層は「ワ」を使用しない。

一方で、若年層が使用する「ワイ」は既存の宇和島市方言を「ワ」の用法を当てはめて新たに取り入れたものだと考えられる。ただし、両者の意味機能は完全に一致するわけではなく、「ワ」が独り言でも使用できるのに対し、「ワイ」は独り言では使用できない。このことから、「ワイ」には聞き手目当て性が備わっていると考えられる。

(7) (雨が降ってきたことに気がつき独り言を言うとき)

あ、雨が降って {きたワ／#きたワイ}。(雨が降ってきた)

なお、宇和島市方言の「ワイ」に関する先行研究では「ワイ」が平叙文だけではなく命令文＜勧誘＞で使用されている用例も確認できるが、筆者にとってはやや不自然な表現になるため使用しない。

(8) わしから言うて聞こう^カワイ。(杉山正世 (1959))

また、宇和島市方言には「ワイ」に由来する形式で「-a+イ」というものがあり、前接語と音融合を起こす。「-a+イ」の意味機能は「ワイ」とほぼ同じものだと思われる。「-a+イ」についても詳しくは 6 章で記述するため、そちらも参照されたい。

(9) (体調がすぐれず早めに寝ることを家族に伝えるとき)

ちょっとしんどいけん、今日はそろそろ寝^{ライ}。(寝るよ)

(10) (先生に欠席連絡をするよう頼まれて返事をするとき)

分かった、先生に連絡しと^{カイ}。(しておくよ)

続いて、「テヤ」について記述するが、「テヤ」も3章以降で詳述するためここでは要点のみを簡単に述べる程度に留める。「テヤ」は発話の引用形式「と言やあ」に由来する形式だと考えられ、基本的に話し手が既に伝えたことを再び繰り返す際や常識だと考えていることを伝える際などに使用される。そのため、「テヤ」の基本的な意味機能は「命題内容が話し手にとって既定の認識（=話し手の中で既に確定している意見や考え方）であることを示す」と規定できる。

(11) (発表会が上手くいかか心配している友人を励ますとき)

大丈夫テヤ。あれだけ練習したんだから。（大丈夫だってば）

(12) (消費期限が切れた牛乳を飲もうとする家族を止めるとき)

その牛乳飲んだらいけんテヤ。（ダメだってば）（「いけん」は「ダメだ」の方言形）

そのため、聞き手が知る由もないことを伝える際には基本的に「テヤ」を使用できない⁵。

(13) (結婚するということを初めて伝えるとき)

*実は、半年後に結婚することになったテヤ。

また、「ワイ」と同じく「テヤ」も若年層と高年層とでは生起する文タイプに世代差がある。高年層は「テヤ」を命令文でも使用できるが、若年層にとっては文法的にやや違和感があるため「テヤ」を使用しづらい。

(14) (早く食事を済ますよう何度も促すとき)

??ちょっと、はよご飯食べさいテヤ。（はよ」は「早く」の方言形）

なお、平叙文専用で高年層のみが使用すると思われる文末詞としては「ガ」がある。ただし、宇和島市方言としての「ガ」の用例や記述が管見の限り見当たらないため、筆者の観察によって収集した用例を示しておく。筆者自身は「ガ」を理解できるが使用しない。

(15) (雨が降っていることに気がついて独り言を言うとき)

?あら、雨やガ。（雨だ）

(16) (間違いなく伝達したのかと疑われて反論するとき)

?ちゃんと言うたガ。（言ったよ）

筆者の観察に基づく限りでは、「ガ」は当該命題について話し手がその場で認識したことを表明したり、聞き手を突き放したりするときに使用されている。すなわち、若年層が使用する「ワ」に類似するものだと考えられる。

2.3.2 命令文専用の文末詞

続いて、命令文専用の文末詞「ヤ」について記述する。「ヤ」は5章で詳述するため、ここでは簡単な紹介に留める。「ヤ」は文末イントネーションの上下によって生じるニュアンスが異なる。「↑」は上昇イントネーション、「↓」は下降イントネーションを表す。

- (17) (仕事から帰ってきた家族に優しく夕飯を勧めるとき)

おかげり。ご飯食べさい {ヤ↑／#ヤ↓}。(食べたらいいよ)

- (18) (何度も声をかけているのに夕飯を済ませない家族に文句を言うとき)

いい加減、はよご飯食べさい {#ヤ↑／ヤ↓}。(食べろよ)

「ヤ↑」は「話し手の指示内容について、実行するかどうかは聞き手に判断を委ねていること」を示し、「ヤ↓」は「話し手の指示内容について、聞き手に指示内容の再認識や実行を促していること」を示す。以上のことから、「ヤ」の意味機能は「命題内容を聞き手に向けて発話しているということを示す」と仮定しておく。

なお、高年層では命令文に限らず、疑問文に付加する用例も見られるが（ただし、典型的な疑問の文脈ではない）、筆者は文法的に違和感があるため使用しない。

- (19) 何ヤ、もいちど言うてみい。（杉山正世（1959））

- (20) 早よせんかヤ。（杉山正世（1959））

2.3.3 疑問文専用の文末詞

疑問文専用の文末詞としては「カ」が挙げられる。これは、共通語の「か」に相当する文末詞で、疑問の文脈に加えて反語や詰問などの文脈でも使用される。

- (21) (残っているお菓子を食べるかどうか確認するとき)

この残っとるやつ、いる {φ／カ}。(いるか)

- (22) (身に覚えのない疑いをかけられて反論するとき)

誰がそんなことする {??φ／カ}。(するものか)

- (23) (ずっと考えていた問題が分かったときに独り言を言うとき)

そう {*φ／カ}、分かったぞ。(そうか)

(21) は真偽疑問文で聞き手にお菓子を食べる意図があるかどうか尋ねる場面である。(22) は疑問語疑問文だが、純粋な疑問の文脈ではなく話し手自身が無実であるということを主張することを目的として発話されたもので反語の文脈であると解釈される。(23) は日本語記述文法研究会（編）（2003）で「納得」の機能を持つ疑問文だとされており、聞き手はその場におらず独り言として用いられたものである。

(21) は「カ」の付加は任意であるが⁶、(22) は「カ」を付加しなければやや不自然に感じ、(23) は文法的に不適格となる。いずれにしても、発話対象となる聞き手あるいは話し手自身の内省を活性化するよう要請することで、話し手が求めている意見を聞き手から引き出したり、話し手自身の思考を展開したりすることにつながっていると考えられる。

以上のことから、「カ」の意味機能は「内省を活性化するよう要請することを示す」と規定できる。共通語の「か」の意味機能について記述した加藤淳（2010）によると、「か」の個別の機能として「情報が話手ママの管理下にないことの表示」としている。しかし、(23)のような「納得」を表す疑問文の場合、確かに発話した時点では情報の全体像は話し手の管理下にはないが、これから思考を展開するまでの足掛かりとなるような情報は既に管理下にあると言えるだろう。また、(23)のように、独り言で「カ」を使用することも可能であるため、「カ」の意味機能には聞き手という要素を含めずに考えた方が適切である。これらのこと考慮して、本稿では上記のように「カ」の意味機能を規定しておく。

なお、高年層のみが使用する疑問文専用の文末詞として「ヲ」というものが確認できる。

(24) どがいしたヲ。 (「どがい」は「どう」の方言形)

(25) これ何程だすヲ。 (「ナンボ」は「どのくらい」の方言形)

(いずれも杉山正世 (1959))

杉山正世（1959）によると、「助動詞タ・ダス・ゴザスの終止形を伴う語に続き、問う意を示す」と記述されている。筆者自身は使用しないが、現在でも高年層が使用しているのを耳にするため、意味を理解することが可能である。

2.3.4 その他の文末詞

最後に、上記のグループに分類されない文末詞をまとめて記述する。なお、高年層の欄にある文末詞で若年層にも同一の形式がある場合は当該項目の部分で高年層の用法についても触れているため、ここで改めて述べることはしない。

まずは、「ナ」・「ネ」（高年層は「ノ」も含む）について記述する。これは共通語の「ね」に相当するもので、平叙文・命令文（ただし、命令形には付加しない）・疑問文のいずれにも使用することができ、主に聞き手に同意を求める発話になる。各形式とも長音が後接し、「ナー」・「ネー」（高年層は「ノー」も含む）になることが多い。

(26) (災害に遭った人同士で当時の話をするとき)

去年の豪雨のときはもういけんと思った {ナ/ネ/?ノ}。(だめだと思ったね)

(27) (早く食事をとるように言うとき)

a. はよ食べろ {*ナ/*ネ/*ノ}。

b. はよ食べて {ナ/ネ/?ノ}。(早く食べてね)

(28) (既にバスが来たかどうか尋ねるとき)

もうバス來たか {ナ／ネ／?ノ}。(もうバスが來たのか)

金水敏・田窪行則（1997）によると、共通語の「ね（え）」の意味機能は「記憶領域内において命題を断定に導くために行う論理計算の過程にあることの表明」（「(再) 計算中」）と規定している。宇和島市方言としての「ナ」・「ネ」（高年層の「ノ」も含む）も、「ね」と同じ意味機能を担う文末詞である。

次は、「ヨ」について記述する。これも共通語の「よ」に相当するものだと考えられ、疑問の文脈となる典型的な疑問文を除いて、いずれの文タイプにも使用することができる。ただし、名詞述語・ノダ文に付加する場合、共通語ではコピュラを伴うのが一般的だが、宇和島市方言ではコピュラは伴わず、直接「ヨ」を付加する。白岩広行・平塚雄亮・酒井雅史（2016）は「ヨ」が付加する際にコピュラが生起するか否かを全国各地で調査しているが、愛媛県ではコピュラが生起しないという結果になっている。この結果は宇和島市方言にも適用できるものだと考えられる。

(29) (雨が降っていることを伝えるとき)

ついさっきから、雨が降りだしたヨ。(降りだしたよ)

(30) (明日の天気を訊かれて答えるとき)

明日は雨 {*やヨ／ヨ}。(雨だよ)

(31) (早く食事をとるように言うとき)

はよ食べろヨ。(食べろよ)

(32) (既にバスが来たかどうか尋ねるとき)

* もうバス來たかヨ。

(33) (既にバスが出発していたことに文句を言うとき)

もうバス出たんかヨ。(出たのかよ)

「ヨ」の意味機能も共通語の「よ」と同じだと考えられる。金水敏・田窪行則（1997）では「当該の命題を I-領域⁷に記載する旨の表明である」と規定している。宇和島市方言の「ヨ」も共通語の「よ」に相当すると考えられるため、この規定をそのまま当てはめる。

続いて、「ゾ」（高年層は異形態として「ド」という形式も使用可）について記述する。「ゾ」は平叙文および疑問語疑問文には付加するが、命令文および真偽疑問文には付加しない。

(34) (先に出発することを伝えるとき)

先に行っとくゾ。(行っておくよ)

(35) (事態が順調に進んでいる状況で独り言を言うとき)

いいゾ、いいゾ。(いいぞ)

(36) (既にバスが来たかどうか尋ねるとき)

* もうバス來たゾ。

(37) (何時のバスで出かけるのか尋ねるとき)

何時のバスゾ。(何時のバスなのか)

(38)*はよ準備しろゾ。

(34) は聞き手の置かれた状況については考慮せず、話し手の意図を一方的に伝える場面である。出発予定時刻を過ぎているにもかかわらず聞き手は着る服を選んでいる、など出掛けるにはまだ時間がかかるということを話し手が認識したため、聞き手の準備ができるのを待つつもりだった話し手は「これ以上待つことはできない」と認識を変更し、「ゾ」を使用して話し手の意図(先に行く／行きたい)を一方的に聞き手に伝えているのである。

また、(35) は独り言で「ゾ」を使用する例文だが、刻々と変化する状況を受けて話し手自身の認識に新たな情報が加わっていることを示す。独り言で使用される「ゾ」については、野田春美(2002)に記述された共通語の「ぞ」の用法と合致する。

しかし、共通語と異なり、宇和島市方言の「ゾ」は(37)のように疑問語疑問文に使用することができる。(37)のように「ゾ」を使用することで、聞き手から新たな情報を引き出し、これから話し手は認識を変更していくということになる。また、話し手の既定の認識として保持していない出来事が生じたことに対する軽い驚きや好奇心、呆れなどの発話態度を表すこともある。なお、共通語で純粹に疑問の文脈を表す場合は文末が上昇イントネーションになるのが一般的だが⁸、宇和島市方言として(37)のように「ゾ」を使用する場合、「ゾ↑」は文法的に違和感があり使用できない。

以上のことから、「ゾ」の意味機能は以下のように規定できる。

【「ゾ」の意味機能】

新たな情報を認識することで、これまでの話し手の認識が今まさに変更されつつあるということを示す。

次に、「デ」(異形態としての「ゼ」も含む)について記述する。若年層が使用する「デ」(「ゼ」)は平叙文と命令文<勧誘>に付加することができる。一方で、その他の命令文や疑問文には文法的に違和感があるため使用できない。この点は共通語の「ゼ」と同様であるが、宇和島市方言では(39)のように名詞述語に「デ」(「ゼ」)が付加する場合、コピュラを介さずに直接付加するという特徴がある。

(39) (家を出る時間が近づいたことを知らせるとき)

もう10時 {φデ/*やデ}。急いで、急いで。(10時だよ)

(40) (早く買い物に行こうと声をかけるとき)

はよ買い物行こうデ。(行こうよ)

(41) (商品の値段を聞くとき)

*これいくらデ。(いくらか)

筆者の内省および観察に基づくと、若年層は男女問わずに「デ」を使用している。一方で「ゼ」と言うこともあるが、共通語に同一の形態のもの（「ゼ」）が存在するせいか、「デ」と比べてやや共通語的である。さらに、若年層女性は「ゼ」をあまり使用せず、男性的な表現であるようにも感じる。

一方で、高年層は男女問わずに「デ」も「ゼ」も頻繁に使用している。さらに、平叙文と命令文＜勧誘＞に加えて、疑問文・ノダ文・名詞述語（コピュラなし）に付加した用例も先行研究から確認できた。筆者の内省では、ノダ文・名詞述語に「デ」（「ゼ」）を使用することは可能だが、(43)のように疑問文に使用することには文法的にやや違和感がある。

(42)ちべたにすわんな汚れるゼ。(地面に座るな、汚れるよ)

(吉田町・吉田町教育委員会 (1983))

(43)これなんぼゼ。(これはいくらか) (吉田町・吉田町教育委員会 (1983))

(44)行かんデ。(行かないよ) (篠崎充男 (1987))

(45)あの子当時は小学生ゼ (小学生だよ) (工藤真由美 (2014))

野田春美 (2002) によると、共通語の「ゼ」の意味機能は「その文の内容を一方的に聞き手に伝えるときに用いられる。聞き手の認識を変えさせようといった意図は強くない」とまとめられており、若年層が使用する「デ」（「ゼ」）の意味機能とも概ね合致しているように思われるため、改めて意味機能を規定することはしない。

一方で、高年層が使用する「デ」（「ゼ」）は若年層が使用する用法に加えて、(43)のように疑問文で使用することもできる。なぜ若年層は「デ」（「ゼ」）を疑問文で使用しづらいのか、また共通語の「ゼ」・「よ」および他方言の「デ」（「ゼ」）との相違点⁹は何か、など疑問点は尽きないが、本稿ではこれ以上触れられないため「デ」（「ゼ」）の詳細な記述は今後の課題とする。

最後に、高年層のみが使用する文末詞「ジャイ」について記述する。筆者の内省では若年層は理解できるが使用しない形式で、中年層・高年層においては現在も頻繁に使用されている。先行研究の用例や筆者の観察に基づくと、「ジャイ」は「ワイ」に由来する「-a+イ」という形式に後接することが多いようである。ただし、篠崎充男 (1987) には名詞述語やノダ文に付加する例も見られる。また、「ジャイ」について「「よ」で強調」と記されているが、具体的にどのような意味機能を担っているのか詳細な記述は見られない。

(46)試験ぐらい通らいジャイ。(通らなくてどうする) (武智正人 (1957))

(47)よう搜してみい、あらいジャイ。(きっとあるはずだ)

(吉田町・吉田町教育委員会 (1983))

(48)雲ジャイ。(雲よ) (篠崎充男 (1987))

(49)行くんジャイ。(行くんだよ) (篠崎充男 (1987))

武智正人 (1957) によると、「ジャイ」は共通語訳として「なくてどうする」とされている。また、「ワイ」に由来する「-a+イ」という形式に後接することからも「ジャイ」は宇和島市方言の伝統的なコピュラ「じや」とは異なると言える。

船木礼子 (2001) は標準語の「ではないか」「じゃない(か)」と置換できるものを山口方言の文末詞「ジャ」として記述している。山口方言の「ジャ」は動詞述語や形容詞述語にも付加するとされているが、筆者の観察する限り宇和島市方言の「ジャイ」はそれらには付加しないため、一般的な確認要求表現とも言い難い。本稿ではこれ以上「ジャイ」について記述することはできないが、今後使用者への聞き取り調査や談話資料を基に文法的な観点から詳細な記述を行っていきたい(「ジャイ」の文法性判断は筆者の観察に基づく)。

(50)ほお、金賞か。おまえもやる {ジャ/*ジャイ}。(やるじゃないか)

(51)どうしたの、ずいぶん顔が白い {ジャ/*ジャイ}。(白いじゃないか)

(いずれも船木礼子 (2001) を参考)

以上、宇和島市の方言文末詞について概観した。この多様な文末詞の中から次章以降は「テヤ」を中心的に取り上げ、用法や用法に生じている世代差について言及する。

ここで、「テヤ」を中心的に取り上げる理由をいくつか挙げておく。まず、世代を問わず現在でも頻繁に使用される方言文末詞でありながら、筆者の内省および観察に基づくと、若年層と中年層・高年層とでは用法に差異があるためである。後で詳しく述べるが、この世代差は共通語化の影響で徐々に「テヤ」が共通語(「ってば」など)に置換されて使用されなくなっているというタイプのものではなく、同一地域内に存在する「テヤ」以外の方言文末詞との張り合い関係の中で、「テヤ」の用法に世代差が生じていると見られるのである。同一地域内の文末詞群による張り合い関係を描いた先行研究は、管見の限りほとんど見られないため、本研究は方言文末詞の研究に一石を投じる意味を持つのではないかと思われる。

また、発話の引用形式に由来する方言文末詞の意味記述は他地域でも進められており(山形市方言の「ズ」(渋谷勝己 (2000))、山口方言の「チャ」(船木礼子 (2000a, 2000b))、岐阜市方言の「テ」(芝田卓哉 (2008))など)、本稿で宇和島市方言の「テヤ」の意味記述を行うことで、今後の研究の広がりがより期待されるテーマであるためでもある。

第3章 「テヤ」の形式的特徴

本章では「テヤ」の先行研究を概観した上で、形式的特徴として前接要素・後接要素および生起する文タイプについて順に記述する。

3.1 「テヤ」の先行研究

宇和島市方言としての「テヤ」の先行研究には国村三郎（1956）、武智正人（1957）、杉山正世（1959）、藤原与一（1986）などがある。ただし、いずれも宇和島市方言あるいはより広域の方言に関する語彙や文法項目を多数収録したもので、「テヤ」に焦点を当てて文法的な観点から詳しく記述したものは多くは見当たらない。ここでは、武智正人（1957）、杉山正世（1959）、藤原与一（1986）の記述を確認する。また、宇和島市方言としてではないが、愛媛県東予地方の旧新居郡方言として「テヤ」を記述している久門正雄（1960）も参照しておく。

3.1.1 武智正人（1957）の記述

これは愛媛県で使用される語彙や文法形式が非常に多く収録されている上、愛媛県全域の計78地点で話者に聞き取り調査を行い、項目ごとに当該地域で使用するか否かが示されている貴重な資料である。その中で「テヤ」については以下の3つの用法が記述されていた（下線は筆者による）。

テヤ と言えば、ったら 「そんなこというなテヤ」
ものだわい 「そんなことあったテヤ」
というのか 「もう済んだテヤ?」

いずれも宇和島市で使用するとされているが、筆者の内省では「テヤ」を「というのか」の意味で使用することには文法的に違和感がある。当時の「テヤ」には発話を引用するという機能が残っていたために、任意の文タイプに「テヤ」が生起していた可能性もあるが、「というのか」の意味で挙げられている用例については共通語の「ってば」と置換できず、本稿で記述対象としている「と言やあ」由来の「テヤ」とは断定できない¹⁰。藤原与一（1986）にも「テヤ」の発生経路について、「「テ」に単純に「ヤ」のそわったものが、じっさいに「と言やあ」的な意味用法を發揮していることもある」とあるため、文末詞の「テヤ」ではなく、「て+ヤ」であるという可能性もある。

なお、「各地方言収集緊急調査」による宇和島市の談話データには以下のような用例が見られた。

(52) (山芋掘りで「蔓を見るのか」と尋ねられた際の話をするとき)

山ん中へおって蔓をよ一見んようなこってどがいするテヤ言うたら

(山の中にいて蔓をよく見ないようなことでどのようにするかと言つたら)

(「各地方言収集緊急調査」(38e 愛媛県宇和島市) を参考)

この「テヤ」は「どがい」という疑問語が使用された疑問語疑問文で使用されているが、先述のとおり本稿で記述対象としている「と言やあ」由来の「テヤ」の確例かどうかは判断し難い。そのため、過去に「と言やあ」由来の「テヤ」が疑問文にも生起可能だったか否かについての判断は保留とする。

3.1.2 杉山正世（1959）の記述

これは宇和島市のアクセントや文法などを総合的に記述したもので、当時の60代および70代の男性話者（つまり、1880年代から1890年代生まれの話者）のデータに基づいている。その中で「テヤ」については以下のように記述されている（下線は筆者による）。

テヤ ①終止形に続き、主張する意をあらわす。「そうテヤ」。（九島に多い。）②迫るよう^{ウチ}に呼びかける。「お母さんテヤ」「のうテヤ」③相手の意に抗して主張する。「そがなこた無いテヤ」「厭テヤ」④願望する。「私にも見らしテヤ」

記述されたもののうち、①と③の用法は筆者も問題なく使用できる。ただし、②の「迫るよう^{ウチ}に呼びかける」という用法では使用できず、高年層話者に使用が限定されているという印象がある。ちなみに④の用法は、動詞の「て形」に文末詞「ヤ」が付加したものだと思われ、本稿で扱う文末詞「テヤ」とは異なるものである。

3.1.3 久門正雄（1960）の記述

これは愛媛県の東予地方に位置する旧新居郡で当時使用されていた語彙や文法形式が多数収録されているものである。その中で、「テヤ」については以下のように記述されている（下線は筆者による）。

てや（句）といへば」の訛「といや」の約転。①要素を提示するのに用ひる。例 何ぞてやの話する」 仕事するてや、はや居らん ②語末に附けて（最も親しい間がら、或は親しい目下の者に対し）念を入れ促す意に用ひる。例 これ見とけてや」 食べんかてや」 早來いてや」 お上りまへてや」 明日行くんかてや」 どーするんぞてや

宇和島市方言としての記述ではないため参考程度に留めなければならないが、②の意味用法は宇和島市方言の「テヤ」とも一致するため、宇和島市方言の「テヤ」に相当するものであると言つてよいと考えられる。「テヤ」が「といや」に由来するという点も武智正人（1957）や後の先行研究と一致する。また、宇和島市方言の先行研究には管見の限り見られないが、文中で使用する用法も当時の新居郡方言としての「テヤ」は有していたことがこの記述からうかがえる。

さらに、筆者の内省では「テヤ」は疑問文や他の文末詞に後接することができないが、上記の記述にはそのような用例も挙げられており非常に興味深い。なお、「テヤ」が生起する文タイプについては後に詳しく記述する。

3.1.4 藤原与一（1986）の記述

藤原与一（1986）も宇和島市方言を記述しているわけではないが、同じ愛媛県で使用される「テヤ」を「「言う」に関する文末詞」の中で、「と言やあ」に由来するものだとしている（下線は筆者による）。

愛媛県下に属する内海大三島の「テヤ」例が、最初にあげられる。

○オコッテ ヤッタ テヤ。（おこってやったよ。（おれは））

○ワシモ ヨー シラン テヤ。（わしもよくは知らないんだがなあ。）

などの「テヤ」は、たぶん、「と言やあ」からのものであろう。ただし、「テ」に「ヤ」が単純にそえられてできた「テヤ」が、やがて「と言やあ」的な意味作用を發揮するようになったというようなことも、あるかもしれない。

他の先行研究の記述と照らし合わせてみても、「テヤ」が「と言やあ」に由来するとする説は妥当であると言え、本稿でも「テヤ」は発話の引用形式「と言やあ」に由来する文末詞であるという立場に立って記述を進める。

3.1.5 通時的な観点から想定される「テヤ」の用法変化のプロセス

ここで、先行研究および筆者の内省をふまえて、通時的な観点から「テヤ」の用法変化として想定されるプロセスを<Ⅰ>から<Ⅲ>の順で示す。

【「テヤ」の用法変化のプロセス】

- <Ⅰ>文中で使用されていた「と言やあ」が形態変化し（ツティヤア→ツテヤ→テヤ：
口語では「って言やあ」か）、「テヤ」になる
- <Ⅱ>文法化により「テヤ」が文末詞になる
- <Ⅲ>発話の引用形式としての機能が希薄化し、話し手の発話態度を表す文末詞として意味用法を拡張させる

以上、「テヤ」の先行研究を確認した上で通時的な観点から想定される用法変化のプロセスをまとめた。話し手の発話態度を表す文末詞となった「テヤ」の用法は現在、若年層と高年層との間でいくつか違いが見られる。「3.2 引用形式と「テヤ」の関係性」では発話の引用形式と「テヤ」の関係性についてより詳しく記述する。

3.2 引用形式と「テヤ」の関係性

藤田保幸（1999）によると、ある種の引用構文の構造は「ムード形式的な文末構造に接近していく」とある。例えば、(53) の「と思う」という部分は発話時における話し手の見解や思いを表明する表現になっている。

(53) それが正しいと思う。

そして、このような表現は発話時の話し手自身の見解や思いでしかなく、一人称以外を主語にとることはできない。

(54) 私はそれが正しいと思う。

(55) * 彼はそれが正しいと思う。

この現象を藤田（1999）では「動詞として自由に意味機能する能力の喪失」だとしている。そして、当該箇所を「だろう」に置き換えるとほとんど文意が変わらないことから、「引用構文の述語部分が話し手の心的態度（ムード）の表現に接近している」ことが分かる。

(56) それが正しいだろう。

こうした現象は「思う」だけでなく、「言う」という動詞でも起こりうる。藤田保幸（1999）によると、(57) のように「というんだ」という引用構文の述語部分を助辞的に付加することで、話し手自身の発話を強めたり、苛立ちを表現したりする言い方になるとしている。

(57) おい、こいつめ、いい加減にしろというんだ。

これに関連するものとして「って」があるが、日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部（編）（2001）によると「「と言う（といふ）」が「てふ」などを経て変化したもの」としている。文末詞としての「って」は(57) の「というんだ」とほぼ同義である。

(58) おい、こいつめ、いい加減にしろって。

さらに「って」は（59）のように文中に生起することもでき、その場合は引用助詞として機能する。また、（60）のように文末に生起した場合、引用だけでなく伝聞の機能も担うことができる。

(59)先生が「明日研究室に来るよう」って言ってたよ。（引用）

(60)明日は学校休みになるんだって。（伝聞）

一方、「ってば」は日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部（編）（2001）によると「「と言えば」の変化したもの」とされており、「って」と同様に引用形式に由来する文末詞である。しかし、「って」が「と言う」を出自としているのに対して、「ってば」は「と言えば」を出自としている点で両者は異なっている。「ってば」は（57）の「というんだ」とほぼ同義で置換可能だが、（62）のような引用の用法では使用できない。

(61)おい、こいつめ、いい加減にしろってば。

(62)*先生が「明日研究室に来るよう」ってば言ってたよ。（引用）

そして本稿で扱う「テヤ」も、藤原与一（1986）によると「と言やあ」という引用形式に由来するとされているが、文末詞としての「ってば」と同様、文中で使用することはできない。また、「ってば」では許容されていた（57）の「というんだ」との置換は、「テヤ」だと許容できるか判断が揺れている。命令文に生起させるとやや違和感が生じるのである。

(63)*先生が「明日研究室に来るよう」テヤ言ってたよ。（引用）

(64)?お、こいつめ、いい加減にしろテヤ。（しろってば）

先述のとおり、「テヤ」は話し手自身の発言を強めたり、苛立ちなどの心情を表現したりすることから意味用法は「ってば」と類似していると思われる。しかし、「ってば」が様々な文タイプと生起可能なのに対して、「テヤ」は生起可能な文タイプが少ない。

この点を念頭に置きながら、以降では先行研究と筆者の内省に基づいて「ってば」と「テヤ」の形式的特徴を比較しながら記述する。

3.3 「ってば」および「テヤ」の形式的特徴

ここからは「ってば」と「テヤ」の形式的特徴について記述する。まず、それぞれの前接要素・後接要素について記述した後に、生起する文タイプについて記述する。なお、「ってば」については東京方言の「って」と「ってば」の文末詞的用法を分析している辻加代子（2001）の記述を参考にしている。

3.3.1 「ってば」の前接要素・後接要素

まず、「ってば」の前接要素・後接要素について記述する。「ってば」は動詞述語・形容詞述語・形容動詞述語・名詞述語のいずれにも生起する。

- (65)もうそろそろ寝るってば。(動詞述語)
- (66)今日は本当に暑いってば。(形容詞述語)
- (67)本当に綺麗だってば。(形容動詞述語)
- (68)明日の試合は多分中止だってば。(名詞述語)
- (69)昨日は図書館に行ったんだってば。(ノダ文)

後接要素としては、辻加代子（2001）によると「ってば」には文末詞「さ」・「よ（お）」は後接するが、「ね（え）」・「な（あ）」は後接しないとしている。

- (70)A：もう時間だよ。早くしろよ。
B：わかってるわ。すぐ行くってばさ。
- (71)ねえお父ちゃん、このおもちゃ買ってってばよお。
(いずれも辻加代子（2001))

3.3.2 「テヤ」の前接要素・後接要素

次に、「テヤ」の前接要素・後接要素を記述する。「テヤ」は動詞述語・形容詞述語・形容動詞述語・名詞述語のいずれにも生起するが、コピュラは前接しない。また、ノダ文に生起する際もコピュラは前接しない。

- (72)もうそろそろ寝るテヤ。(動詞述語)
- (73)今日は本当に暑いテヤ。(形容詞述語)
- (74)本当に綺麗 {テヤ/ *やテヤ¹¹}。(形容動詞述語)
- (75)明日の試合は多分中止 {テヤ/ *やテヤ}。(名詞述語)
- (76)昨日は図書館に行ったん {テヤ/ *やテヤ}。(ノダ文)

また、「テヤ」には聞き手に同意を求める「ナ」や「ネ」は後接するが、その他の文末詞は後接しない。

- (77)もうそろそろ寝るテヤ {ナ/ネ/ *ヤ/ *ヨ/ *ゼ/ *ワ}。

3.3.3 「ってば」が生起する文タイプ

続いて、「ってば」が生起する文タイプを記述する。辻加代子（2001）によると、東京方言の「ってば」には基本的に生起制限はないが、真偽疑問文や疑問語疑問文には意的制約があるとしている。

- (78) 起きるってば。（平叙文）
- (79) 松山に行こうってば。（命令文：<勧誘>）
- (80) ご飯食べろってば。（命令文：<命令>）
- (81) もう泣くなってば。（命令文：<禁止>）
- (82) *明日雨降るかってば。（真偽疑問文：<疑問>）
- (83) *いつ言ったかってば。（疑問語疑問文：<疑問>）

3.3.4 「テヤ」が生起する文タイプ

一方、筆者の内省に基づくと「テヤ」は平叙文では問題なく使用できるが、命令文ではやや使用しづらい。また、「ってば」と同じく疑問文では使用できない。

- (84) 起きるテヤ。（平叙文）
- (85) ??松山に行こうテヤ。（命令文：<勧誘>）
- (86) ??ご飯食べさいテヤ。（命令文：<命令>）
- (87) ??もう泣きさんなテヤ。（命令文：<禁止>）
- (88) *明日雨降るかテヤ。（真偽疑問文：<疑問>）
- (89) *いつ言ったかテヤ。（疑問語疑問文：<疑問>）

(84) の平叙文は「テヤ」が最も自然に使用できる文タイプである。ここでは「さっきから言っているだろう」という苛立ちが含意され、共通語の「行くってば」とほぼ同義である。(85)～(87)の命令文では「テヤ」を使用するとやや違和感があり、使用できるか筆者の判断が揺れている。筆者の内省では、命令文においては宇和島市方言の「ヤ」を使用する方が自然である。(88)・(89)は疑問文だが、「テヤ」は自分の考え方や意見を聞き手に表明する際に用いるため、疑問文では使用できない。

以上、「ってば」と「テヤ」が生起可能な文タイプについて概観した。なお、「3.2 引用形式と「テヤ」の関係性」で述べたように引用構文で用いられる「という」などの形式は文タイプによる生起制限がない。これらのこととを表2にまとめる。

表 2：各形式が生起する文タイプ

	平叙文	命令文	疑問文	<凡例>
という(引用)	○	○	○	○…問題なく生起可能なもの
ってば	○	○	×	?…生起可能か否か判断が揺れるもの
テヤ	○	?	×	×…生起不可能なもの

以上のことから、「という」のような発話の引用形式の段階では様々な文タイプと生起できるが、文末詞として用いられる「ってば」は疑問文と、そして文末詞「テヤ」は命令文および疑問文とそれぞれ生起できなく（または生起させづらく）なっている。「3.4 「テヤ」が生起する文タイプに関するアンケート調査」では「テヤ」が生起する文タイプに関して、筆者の内省が妥当なものなのか確かめるために行ったアンケート調査の結果を報告する。

3.4 「テヤ」が生起する文タイプに関するアンケート調査

ここまで「ってば」および「テヤ」と生起可能な文タイプについて筆者の内省や、辻加代子（2001）を参照しながら述べた。ここからは「テヤ」が生起する文タイプに関して、筆者の内省がどの世代にも当てはまることなのかということを確かめるために行ったアンケート調査について述べる。

3.4.1 調査概要

アンケート調査は、若年層・中年層・高年層の3世代に分けて実施した。若年層は宇和島市にある筆者の母校に在学中の生徒を対象にした。中年層・高年層は、宇和島市にお住まい・お勤めの方々、その家族等関係者の方々を中心に調査への協力を依頼した。なお、調査の際は出身地を宇和島市に限定しなかったが、本稿の論旨に添うように考察対象としては出身地が宇和島市のものだけに絞った。そうしたことでも性別回答数が少なくなってしまったことに課題が残るが、筆者が観察する限り、「テヤ」が生起する文タイプについては男女差があるようには感じられないため、論旨に大きな影響は及ぼさないと考えられる。

今回のアンケート調査の概要は下記のとおりである。

- 回答者

若年層：2001年～2002年生まれの中学生 122人

(性別：男子 54人、女子 66人、無記入 2人)

中年層：30代～50代の 70人

(性別：男性 27人、女性 43人)

高年層：60代～90代の 44人

(性別：男性 7人、女性 37人)

- 調査時期：2016年7月から同年11月まで

- 調査項目：次頁のとおり

(平叙文：動詞の現在形)

親から起きるよう何度もしつこく言われて答えるとき（共通）

a.起きるヨ／b.起きるテヤ。

(意向形による命令文：<勧誘>)

映画に遅れそうだから早く行こうと友人に言うとき（若年層）

集合時間に遅れそうだから早く行こうと一緒にいる友人に言うとき（中年層・高年層）

はよ {a.行こうヤ／b.行こうテヤ}。

(命令形による命令文：<命令>)

時間になっても食べ終わらない友人に早く食べるよう催促するとき（共通）

はよ {a.食べさいヤ／b.食べさいテヤ}。

(禁止形による命令文：<禁止>)

何度も慰めているのに泣き続ける友人に声をかけるとき（共通）

分かったけん、もう {a.泣きさんなヤ／b.泣きさんなテヤ}。

回答者には「テヤ」を付加した表現と、「テヤ」の代わりに使用されると筆者が想定した宇和島市の方言文末詞「ヤ」あるいは「ヨ」を付加した表現を示し、それぞれの表現に対して「言う」・「言わないがおかしくない」・「言わないしおかしい」の中からあてはまるものを選択してもらった。「テヤ」と「ヤ」および「ヨ」の意味用法は完全に一致するわけではないが、「テヤ」に類似する共通語の「ってば」は筆者の内省および観察ではほとんど使用されることがないため、今回の調査では「ってば」ではなく「ヤ」あるいは「ヨ」を使用した表現を調査項目として設定した。ちなみに、「ヤ」と「ヨ」は生起可能な文タイプや意味機能に差異があるが、そのことについては5章で詳しく述べる。

また、今回の調査では友人や家族など親しい人との会話文の中で様々な状況を設定しているため、回答者が返答する状況をより具体的にイメージできるよう、若年層と中年層・高年層によって設定場面を一部変えた項目もある。なお、読みやすさを考慮してここでは論旨に関わる部分の調査項目およびその結果のみを示し、その他の調査項目および調査結果は本稿末尾の資料編に示すこととする。

3.4.2 調査結果と考察

アンケート調査の結果は次頁の図3・図4・図5・図6のとおりである。以下、説明の際に「許容度」と呼ぶものは「言う」・「言わないがおかしくない」を合計した割合のことを指している。

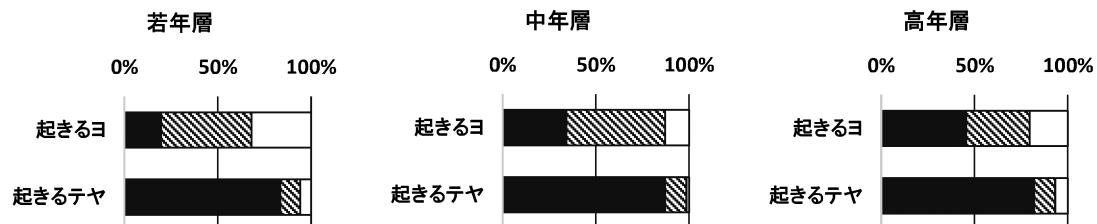


図 3：平叙文「起きる」の世代差

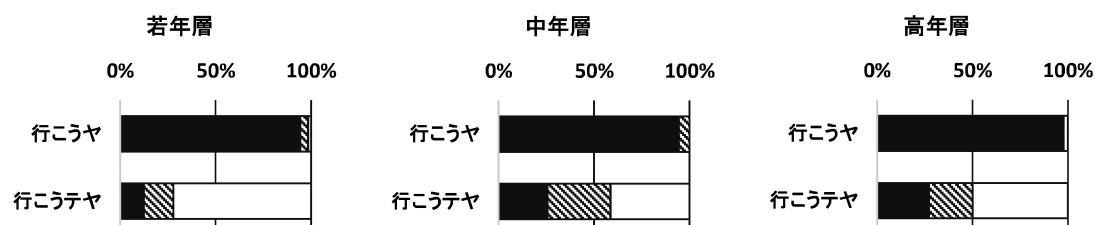


図 4：命令文＜勧誘＞「行こう」の世代差

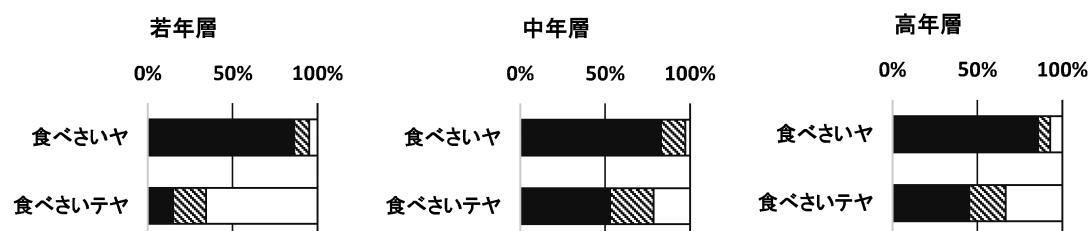


図 5：命令文＜命令＞「食べさい」の世代差

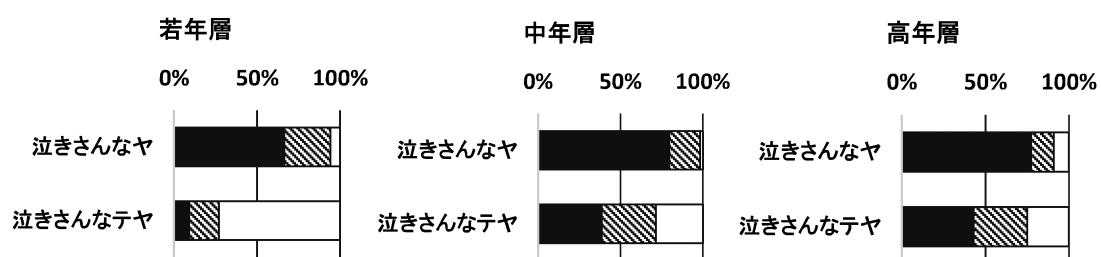


図 6：命令文＜禁止＞「泣きさんな」の世代差

■ 言う □ 言わないがおかしくない □ 言わないしおかしい

まず、平叙文の調査結果から考察する。平叙文では図3のとおり、全世代で安定して「テヤ」が使用されていることが分かる。今回の調査では「テヤ」を使用する場面を想定しや

すいように、調査項目に「何度も」や「しつこく」といった文言を使用している。「テヤ」の意味用法についての詳細は4章で記述するが、「テヤ」は発話の引用形式に由来する文末詞であるため何度も繰り返し言う（それに伴って苛立ちも生じる）ような場面で用いられることが中心的な用法であると考えられるためである。一方で、「テヤ」の代替候補となる「ヨ」（共通語の「よ」に相当）は「テヤ」と比べると全世代で許容度が下がる。今回のように「何度も繰り返し」というような場面では「ヨ」では十分に話し手の発話態度を表すことはできないため、「起きるヨ」を言うと回答した人が少ないと考えられる。

次に、命令文について考察する。<勧誘>・<命令>・<禁止>を調査したが、いずれも概ね同じ結果となった。つまり、平叙文に比べると命令文での「テヤ」の許容度は全世代で低くなっている。しかし、中年層・高年層と若年層とでは若干様相が異なる。中年層・高年層では「テヤ」を使った表現の許容度が5割から7割程度と比較的高い水準であるのに対し、若年層では3割程度に留まっているのである。

一方で、代替候補となる「ヤ」は「テヤ」とは異なり、<勧誘>・<命令>・<禁止>のいずれにおいても全世代で安定して使用されている。先述のとおり、「テヤ」が使用できなくなると言っても「ってば」による共通語化が生じているわけではないのである。したがって、命令文において調査項目にあるような「何度も」・「しつこく」というニュアンスを生じさせるためには、少なくとも若年層は「ヤ」を工夫して使用する（下降イントネーションで使用する、あるいは大きな声で言うなど）ことで、「テヤ」が担うような話し手の苛立ちを表現していると思われる。繰り返しになるが、「ヤ」の意味用法は「テヤ」と完全に一致するわけではないが、命令文では「テヤ」や「ってば」が使用しづらいため、「ヤ」がその代替形式としての役割を担っていると考えられる。そのため、「テヤ」が問題なく使用できる平叙文では、「テヤ」と意味用法が完全には一致しない「ヨ」で代替する必要がなく、「ヨ」の許容度もそれほど高くはないのである。

アンケート調査の結果のポイントをまとめると以下のようになる。

【アンケート調査の結果のポイント】

- 「テヤ」は平叙文では全世代で安定して使用されている。
- 「テヤ」は命令文では平叙文と比べると全世代で許容度が下がる。
- ただし、命令文でも中年層・高年層では比較的許容度が高いのに対し、若年層ではかなり許容度が低く、「ヤ」が「テヤ」の代替をしている状況だと考えられる。

3.5 3章のまとめ

3章では「テヤ」の形式的特徴を共通語の「ってば」と比較しながら記述した。また、アンケート調査の結果から「テヤ」を命令文で使用するか否かという部分に世代差が生じていることが明らかとなった。命令文で「テヤ」を使用しづらい若年層は同じ宇和島市方言の「ヤ」を工夫して使用することで「テヤ」の代替をしているという現状が見えてきた。

第4章 「テヤ」の意味用法

4章では「テヤ」の意味用法について主に筆者の内省や観察に基づいて記述する。まずは「テヤ」と同じく発話の引用形式を出自とする共通語の「ってば」の意味用法のうち「テヤ」と重なる部分を「テヤ」のプロトタイプな意味用法としてまとめた後、「テヤ」のみに当てはまる用法も含めて「テヤ」の談話展開上の意味用法として記述する。なお、談話展開上の意味用法とは話し手が談話を展開する上でどのような意図に基づいて「テヤ」を使用するのかという観点で用法を分類したものである。本章は共通語の「ってば」と「テヤ」を比較させる形式で「テヤ」の意味用法を記述していくため、例文は基本的に共通語で示すこととし、「テヤ」を使用する文についてのみ宇和島市方言で示す。

4.1 「テヤ」のプロトタイプな意味用法

「と言えば」に由来する「ってば」と同様、「と言やあ」に由来する「テヤ」のプロトタイプな意味用法は次の3つの要素を含むものであると本稿では仮定する。以下の3つの要素は発話の引用形式である「と言えば」（あるいは「と言やあ」）が原理的に備えていると考えられる要素に過ぎないが、現在の「テヤ」は話し手の発話態度を表す文末詞として拡張した意味用法を獲得している。そのため、以下の要素をより多く含んでいる意味用法が、「テヤ」のよりプロトタイプな意味用法であると考えられるのである。

【発話当事者の認識状態に関する3つの要素】

- <A>話し手にとっての既定の認識を伝達する
- 聞き手にとっても既定の認識であると話し手が想定している
- <C>聞き手が話し手の想定に反する言動を行っていると話し手が認識している

プロトタイプな意味用法と認定する要素の1つ、の根拠となるのは基本的に「先行発話で話し手の既定の認識を聞き手に伝達済みである」というものである。なぜなら「テヤ」も「ってば」も発話の引用形式に由来するため、既に発話したことを再び繰り返すということが基本的な機能だからである。

では、実際に「テヤ」のプロトタイプな用例を確認する。「テヤ」は(93)のように話し手が既に聞き手に伝えたことを再び伝える際に用いるのが一般的である。

(90) (起きるよう促されたためもうすぐ起きると返事をするとき)

- A: もう朝よ、そろそろ起きなさい。
- B: 分かった。もうすぐ起きるよ。
- (しかし、Bがなかなか起きてこない。)

A : いい加減に起きなさい。いつまで寝ているの。

B : うるさいな、もう起きる {ってば／テヤ}。

A (=聞き手) から起きるように促された B (=話し手) は「起きる意志を持っている」という認識を A に伝達したため、A は B がもうすぐ起きるということを知っていると B は想定している (=の要素)。しかし、A が B に起きるよう再び促しているため (=<C>の要素)、B は再び自身の既定の認識を伝達している (=<A>の要素)。

話し手が聞き手にまだ伝えていない新規の情報を伝える (91) のような場面ではまたは<C>の要素に反するため、基本的に「ってば」も「テヤ」も使用できない。

(91) (急用が入って会えなくなったことを伝えるとき)

A : 今週末、予定どおりに会えるかな。

B : ごめん。急用が入った {#ってば／#テヤ}。また今度にしよう。

4.2 「テヤ」の談話展開上の意味用法

ここからは「テヤ」の談話展開上の意味用法について筆者の内省および観察に基づいて記述し、適宜用例として宇和島市の談話データも示す。「テヤ」の談話展開上の意味用法は大きく分けて 4 つある。本文中で各意味用法に言及する際は [] の名称で記述する。

4.2.1 既に伝えた発話内容を再び伝える (= [発話内容の再提示])

これは先述した 3 つの要素を含み、かつの話し手の想定の根拠として話し手による先行発話が存在するもので、「テヤ」の最もプロトタイプな意味用法だと言え、「ってば」とも共通する意味用法である。同じことを繰り返し言わなければならないという点で (92) のように苛立ちが生じることが多いが、(93) のように聞き手を安心させるための念押しとしても使用できる。

(92) (野球に誘ってきた友人に雨だから嫌だという旨を伝えるとき)

A : 明日の午後から野球しようよ。

B : あー、明日は雨らしいよ。濡れたくないし、遠慮しておくよ。

A : 別にいいじゃん。野球しようよ。

B : しつこいなあ。濡れるのは嫌なん {だってば／テヤ}。

(93) (発表会が上手くいか心配している友人を励ますとき)

A : 明日の発表、練習とおりにできるかなあ。

B : 大丈夫だよ。

A : 本当に大丈夫かなあ。

B : 大丈夫 {だってば／テヤ}。あれだけ練習したんだから。

命令文と呼びかけで使用される「テヤ」も3つの要素を含み、の話し手の想定の根拠が話し手自身の先行発話によるため【発話内容の再提示】に相当する。ただし、筆者は命令文では「テヤ」を使用しづらく、呼びかけでは全く使用できない。一方これらは、いずれも高年層なら使用することができる用法である（「若」は若年層、「高」は高年層）。

(94) (のんびり食事をする人に早く食べるよう促すとき)

A：早くご飯食べてよ。集合時間に間に合わないよ。

B：(それでものんびり食事をしている。)

A：ちょっと、{早く食べろってば／??はよ食べさいテヤ（若）／はよ食べさいテヤ（高）}。

(95) (母親を呼んでも返事がなく、再び呼びかけるとき)

A：お母さん。

B：（「お母さん」は反応しない。）

A：お母さん {ってば／*テヤ（若）／テヤ（高）}。

4.2.2 常識に反しているということを伝える（＝【非常識の伝達】）

これは話し手にとって社会通念上の共有知識（＝常識）であると認識していることに反する言動を聞き手が行った際に、話し手の中で形成されていた既定の認識から逸脱しているということを聞き手に伝える意味用法である。【発話内容の再提示】と同様に3つの要素はいずれも含んでいるが、の話し手の想定の根拠が話し手による先行発話の存在によるものではなく、社会通念上の共有知識に基づくものであるという点が異なっている。これも「ってば」と共通する意味用法である。

(96) (消費期限が切れた牛乳を飲もうとする家族を止めるとき)

A：あ、この牛乳、昨日で消費期限が切れているよ。

B：でも1日くらい大丈夫だよね。

A：{だめだってば／いけんテヤ}。お腹壊したらどうするの。

(97) (自分のタオルを勝手に使う友人に文句を言うとき)

A：あれ、俺のタオルがない。どこにいったんだろう。

B：（Bが勝手にAのタオルを使っている。）

A：おい、それ俺の {だってば／テヤ}。自分のやつを使えよ。

これらは、「消費期限の切れた牛乳を飲んではいけないこと」や「他人のタオルを勝手に使ってはいけないこと」が、話し手にとって常識であり、聞き手がその常識に反する言動を行った（と話し手がみなしている）ことを伝えるものとなっている。

4.2.3 話し手の認識が聞き手と一致しているということを伝える(=[同意])

これは聞き手の発話を受けて話し手が「自分の認識と一致している」と判断し、それを伝達して聞き手に同意する意味用法である。話し手も当該命題についての知識や考えがあり「まさにそのとおりだ」と思った場合、あるいは実際には考えていないでも以前からの既定の認識であると見せかける場合に使用する。

なお、この意味用法は話し手が聞き手と同じ認識を共有しているため 3 つの要素のうち <C>を含まないことになる。また、これまでの 2 つの意味用法で使用できていた「ってば」はこの意味用法では使用できない。

(98) (料理の味の割に値段が高いと感じたとき)

A : あの店のカレーライス、高すぎるよね。

B : 本当 { * だってば / テヤ }。大して美味しいもないのに。

(99) (商品の値段が今日より前日の方が安かったとき)

A : あっ、昨日の方が今日より 100 円安かったか。損した。

B : そう { * だってば / テヤ }。だから、買っておけばって言ったのに。

この意味用法では <C> は満たさないが、 の話し手の想定の根拠は聞き手の先行発話に基づいているため、 の要素を満たす。また、話し手に既定の認識があり（またはあるように見せかけて）、それを伝達するため、<A> の要素も満たしている。

ただし、聞き手と認識が一致していればどのような文脈でも「テヤ」が使用できるというわけではない。(98) は「美味しいカレーライスの値段が高い」、(99) は「わざわざ値段が高い日に商品を買ってしまった」というようにマイナスの評価を下す文脈である（以下、このような文脈を<マイナスの一致>と呼ぶ）。<マイナスの一致>では「テヤ」を問題なく使用できるが、(100)・(101) のようなプラスの評価を下す文脈（以下、このような文脈を<プラスの一致>と呼ぶ）では「テヤ」を使用することにやや違和感がある。

(100) (料理の味の割に値段が安いと感じたとき)

A : あの店のカレーライス、安かったね。

B : 本当 { * だってば / ?? テヤ }。味相応ってところじゃない。

(101) (天気予報では雨天の予報だったが、雨が降らずに祭りが決行できたとき)

A : 昨日のお祭り、雨降らなくてよかったね。

B : 本当 { * だってば / ?? テヤ }。よかった。

なぜ同じ [同意] でも<プラスの一致>では「テヤ」を使用することに違和感が生じるのだろうか。この問題を考えるために、各用例の既定の認識と現状の認識について考えることにする。

例えば、(98) の場合は話し手と聞き手の双方の既定の認識として「美味しい料理は安いはずだ」というものがあるとしよう。しかし、実際は「美味しい料理が思っていたよりも高かった」のである。また、(99) の場合も既定の認識は「商品は安い時に買った方がよい」というものだが、実際は「わざわざ値段が高い時に買ってしまった」のである。つまり、<マイナスの一致>は既定の認識と事実にずれが生じている文脈であると言える。

次に、<プラスの一致>について考えてみよう。(100) の場合は既定の認識は話し手と聞き手の双方で「美味しい料理は安いはずだ」というもので、実際のところも「値段の安さは味相応であった」のである。また、(101) の場合も既定の認識は「祭りの日は雨が降らない方がよい」というもので、実際のところも「祭りの日に雨が降らなくてよかったです」である。つまり、<プラスの一致>は<マイナスの一致>と異なり、既定の認識と事実との間にずれは生じていない文脈であると言える。

「テヤ」のプロトタイプな意味用法だと認定する要素の1つ、<C>を〔同意〕は満たしていないということは先述のとおりである。しかし、<マイナスの一致>に関しては<C>の文言のうち「聞き手が話し手の既定の認識と相違する言動を行っている」という部分を「事実が既定の認識と相違する」というように拡張して解釈した用法だと捉えることができるのではないだろうか。既定の認識と事実にずれが生じるということは(98)・(99)の用例から分かるように、往々にしてマイナスの評価を生むことになるだろう。一方で、<プラスの一致>は既定の認識と事実にずれが生じていないため、「テヤ」を使用することにやや違和感が生じるのである。

いずれにせよ、〔同意〕が<C>の要素を満たさないことに変わりはないのだが、<マイナスの一致>の方が<プラスの一致>よりも「テヤ」のプロトタイプな意味用法により近いため、<マイナスの一致>では違和感なく「テヤ」を使用でき、<プラスの一致>ではやや違和感が生じると考えられる。ちなみに、<プラスの一致>では「テヤ」を使用することに違和感が生じるという筆者の認識は妥当なようで、後述する現地調査の結果とも一致した。調査の結果、<プラスの一致>の用法を獲得しているか否かには個人差がある段階であることが分かった。

4.2.4 意外な出来事で生じた感情を詠嘆的に表明する (= [ずれの表明])

これは話し手の常識や普段の認識からずれているような意外な出来事に直面した際に生じたあきれや驚きなどの感情を詠嘆的に周囲の人々に表明するという意味用法で、先行発話は必須ではなく対話場面でなくてもよい。

なお、この意味用法について筆者は使用しないが、談話データからも用例が確認できることから高年層では使用可能な意味用法だと思われる。筆者の内省および観察によると、若年層では「ワ」という文末詞の方が当該場面で使用されている。ちなみに、「ってば」はこの意味用法でも使用できない。

(102) (家族の中でご飯を 3 杯も食べる人を見たとき)

{ *よくそれだけ食べるってば／?よーそんだけ食べるテヤ／よーそんだけ食べるワ }。

(103) (今年の夏は暑さが異常だと感じたとき)

A : いやー、今年の夏は暑さが違う { *ってば／?テヤ／ワ }。

B : うん、毎年暑くなっている気がする。

(104) (祭りのために購入する着物について話すとき)

モスの着物やジョーゼットこーてもろたんじや言うて喜んでナー、ジョーゼット目につくテヤ。

(モスリンの着物やジョーゼット(透き通るような夏用の着物)を買ってもらったのよと言って喜んでね、ジョーゼットは目立つことよ。)

(「各地方言収集緊急調査」(38e 愛媛県宇和島市)を参考)

[ずれの表明] は意外な出来事に直面した際に生じる感情を表明するものであるため、<A>の「既定の認識を表明する」とは言い難いものだが、「テヤ」を使用することであたかも話し手の既定の認識であると見せかける形をとっている。なぜそのようなことをするのかというと、あきれや驚きなどの感情を話し手の既定の認識と見せかけて周囲に表明することで、「本当にあきれる（または驚く）べきことなのだ」という発話態度を表現することができるからである。

意外な出来事に直面した際に生じたあきれや驚きを表明する場面であるため、および<C>の要素は含まないが¹²、上述のとおり、辛うじて<A>を含むことになるため「テヤ」を使用できるのだと考えられる。

4.2.5 プロトタイプな意味用法と拡張した意味用法の関係性

ここまで「テヤ」の 4 つの談話展開上の意味用法について、プロトタイプな意味用法と認定する 3 つの要素を参照しながら記述した。表 3 より、「テヤ」は<A>の要素さえ満たせば、および<C>の要素を満たさなくても使用できるという段階まで意味用法が拡張していることが分かる。[発話内容の再提示] が全ての要素を満たし、の根拠も話し手自身の先行発話にあるという点で最もプロトタイプな「テヤ」の談話展開上の意味用法であるとすると、表の右側にあるものほどプロトタイプな意味用法から拡張した意味用法であると言える。

なお、「ってば」が使用できるのは<A>・・<C>をいずれも満たす [発話内容の再提示] と [非常識の伝達] までである。

表 3：「テヤ」のプロトタイプな意味用法と認定する要素と各意味用法の対応関係

「テヤ」のプロトタイプな意味用法と認定する要素	発話内容の再提示	非常識の伝達	同意	ずれの表明
<A>話し手にとっての既定の認識を伝達する	○	○	○	(○)
聞き手にとっても既定の認識であると話し手は想定している (話し手の先行発話)	○ (話し手の先行発話)	○ (社会通念上の共有知識)	○ (聞き手の先行発話)	×
<C>聞き手が話し手の想定に反する言動を行っていると話し手が認識している	○	○	×	×

＜凡例＞
 ○…当該要素を含む
 (○)…辛うじて当該要素を含む
 ×…当該要素を含まない
 ・の括弧内の文言はを満たす根拠となるもの

最後に、上記の記述から導き出せる「テヤ」の基本的な意味機能についても述べておく。
 <A>は「テヤ」のいずれの意味用法にも共通する要素で、「テヤ」の基本的な意味機能であると言える。ただし、<A>は話し手の立場から見た「テヤ」を発話する当事者の認識状態に関する要素であるため、少し手を加えて「テヤ」の基本的な意味機能を下記のように規定する。

【「テヤ」の基本的な意味機能】

命題内容が話し手にとっての既定の認識であることを示す。

以上、「テヤ」のプロトタイプな意味用法および談話展開上の意味用法について記述し、「テヤ」の基本的な意味機能も規定した。

4.3 「テヤ」の意味用法に関する聞き取り調査

ここからは、これまでに記述した「テヤ」の意味用法の使用の可否にどのような世代差が生じているか確かめるために行った聞き取り調査について述べる。

4.3.1 調査概要

先述したように、[発話内容の再提示]（命令文・呼びかけ）と[ずれの表明]については筆者の内省および観察から、「テヤ」の使用の可否に世代差が生じていると考えられる。そこで、使用実態を明らかにするために現地調査を行った。ここでは調査概要と結果を報告する。

調査は面談による聞き取り形式で行った。回答者は宇和島市で6歳から12歳までの期間を過ごした人とし、若年層（20代）10人（男女5人ずつ）と高年層（60代～80代）10人（男女5人ずつ）を対象にした。調査項目は本文で示した用例（筆者による作例）と同じものを使用し、使用するか否かを口頭で尋ねた。調査期間は2017年8月から2018年1月までである。なお、詳しい話者情報は資料編に示す。

・調査項目

(I) 平叙文

[発話内容の再提示]

(発表会が上手くいくか心配している友人を励ますとき)

A : 明日の発表、練習とおりにできるかなあ。

B : 大丈夫だよ。

A : 本当に大丈夫かなあ。

B : 大丈夫テヤ。あれだけ練習したんだから。

[非常識の伝達]

(消費期限が切れた牛乳を飲もうとする家族を止めるとき)

A : あ、この牛乳、昨日で消費期限が切れているよ。

B : でも1日くらい大丈夫だよね。

A : いけんテヤ。お腹壊したらどうするの。

[同意 : <マイナスの一一致>]

(料理の味の割に値段が高いと感じたとき)

A : あの店のカレーライス、高すぎるよね。

B : 本当テヤ。大して美味しいもないのに。

[同意 : <プラスの一一致>]

(天気予報では雨天の予報だったが、雨が降らずに祭りが決行できたとき)

A : 昨日のお祭り、雨降らなくてよかったね。

B : 本当テヤ。よかった。

[ずれの表明]

(家族の中でご飯を3杯も食べる人を見たとき)

よーそんだけ食べるテヤ。

(II) 命令文 : <命令>

[発話内容の再提示]

(のんびり食事をする人に早く食べるよう促すとき)

A : 早くご飯食べてよ。集合時間に間に合わないよ。

B : (それでものんびり食事をしている。)

A : ちょっと、はよ食べさいテヤ。

(III) 呼びかけ

[発話内容の再提示]

(母親を呼んでも返事がなく、再び呼びかけるとき)

A : お母さん。

B : (「お母さん」は反応しない。)

A : お母さんテヤ。

4.3.2 調査結果と考察

調査結果は表4のとおりである。

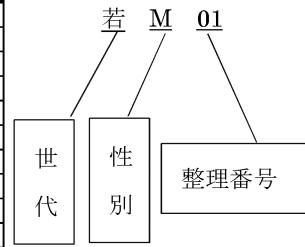
表4：「テヤ」の談話展開上の意味用法に関する調査結果

回答者	「テヤ」の談話展開上の意味用法							
	平叙文 叙述				命令文		呼びかけ	
	発話内容の 再提示	非常識の 伝達	同意		ずれの表明	発話内容の 再提示	発話内容の 再提示	
			マイナスの 一致	プラスの 一致				
若M02	●	●	●	×	●	●	◇	
若M05	●	●	●	●	●	◇	◇	
若M03	●	●	●	●	◇	●	×	
若M01	●	●	●	×	◇	×	×	
若M04	●	●	●	●	◇	×	◇	
若F03	●	●	●	▽	◇	×	×	
若F05	●	●	●	▽	◇	▽	▽	
若F01	●	●	●	●	×	●	×	
若F04	●	●	●	●	×	×	●	
若F02	●	●	●	◇	×	×	×	
高M01	●	●	●	●	●	●	●	
高M03	●	●	●	●	●	●	●	
高F01	●	●	●	●	●	●	●	
高F03	●	●	●	▽	●	●	●	
高M02	●	●	●	×	●	×	●	
高F04	●	●	●	×	◇	●	●	
高M04	●	●	●	●	◇	×	●	
高F05	●	●	●	●	×	●	●	
高M05	●	●	●	●	×	×	●	
高F02	●	●	●	×	×	▽	●	

<凡例>

- …問題なく使用できる
- ◇…理解できるが使用しない
- ▽…使用できるか迷う
- ×…使用できない

<回答者記号>



先述したことと重なる部分も多いが、調査結果から分かることを簡単にまとめておく。平叙文における〔発話内容の再提示〕・〔非常識の伝達〕・〔同意：<マイナスの一致>〕は全世代で安定して「テヤ」が使用されている。一方で、〔同意：<プラスの一致>〕は既定の認識と事実にずれが生じていないという点で、<マイナスの一致>よりも「テヤ」のプロトタイプな意味用法からより拡張した用法であり、使用できるか否かには個人差がある状況であると考えられる。なお、〔ずれの表明〕に関しては、確かに若年層と比較するとやや高年層の方が使用する人が多かったが、高年層の中でも使用できる人とできない人が混在しており、個人差が見られる状況である。

これも先述のとおりだが、命令文においてはやや高年層の方が使用する人が多く、若年層では使用できないと回答した人が多かった。また、呼びかけについてはさらに世代差がはっきりと表れ、今回調査した高年層は全員が使用できると回答したのに対し、若年層ではほとんど使用されていないという結果になった。

4.4 4章のまとめ

4章では「テヤ」のプロトタイプな意味用法と談話展開上の意味用法について、共通語の「ってば」と比較しながら記述した。これまで記述してきたことを整理すると表5のようになる（宇和島市方言の記号は表4を参照。疑問文は未調査のため筆者の内省および観察に基づいた）。

表5：各意味用法における使用の可否

文タイプ	表現意図	談話展開上の意味用法	共通語	愛媛県宇和島市方言	
			(だ)ってば	テヤ(高)	テヤ(若)
平叙文	叙述	発話内容の再提示	◎	◎	◎
		非常識の伝達	◎	◎	◎
		同意：<マイナスの一致>	×	◎	◎
		同意：<プラスの一致>	×	○	○
		ずれの表明	×	○	△
命令文	命令	発話内容の再提示	◎	○	△
疑問文	疑問	発話内容の再提示	×	×	×
	呼びかけ	発話内容の再提示	◎	◎	×

<共通語の記号>

◎…問題なく使える ×…使用できない

<宇和島市方言の記号>

◎…ほぼ全員が問題なく使える ○…半数以上が使える
△…使える人が2人以上半数未満 ×…使える人が1人以下

「テヤ」には現在3つの世代差が確認できる。1つ目は「テヤ」を命令文で使用するか否か、2つ目は「ずれの表明」で「テヤ」を使用するか否か、3つ目は呼びかけで使用するか否かである。いずれも高年層は「テヤ」を使用し、若年層は使用する割合がかなり低いというものが現状である。

命令文と呼びかけに生じる世代差の要因は、「テヤ」の文法化により発話の引用形式としての機能が希薄化していることに関係すると考えられる。ただし、「3.3.4 「テヤ」が生起する文タイプ」で述べたとおり、命令文における世代差は「ヤ」という文末詞の存在も関わっていると思われるため、以降は命令文と「ずれの表明」に生じる世代差の要因を順に考察することとする。

第5章 命令文における世代差の要因

5章では、なぜ命令文における「テヤ」の使用の可否に世代差が生じているのかという疑問について考察していく。結論から先に言うと、「テヤ」が発話の引用形式から話し手の発話態度を表す文末詞へと変化する流れと同時に、若年層では同じ宇和島市方言の「ヤ」が命令文専用の文末詞として定着したことが関係していると考えられる。「ヤ」が命令文専用の文末詞として定着し、「テヤ」の代替形式として機能することが可能だったため、「テヤ」の文法化という用法変化が促進され、命令文でも使用できていた「テヤ」は徐々に平叙文専用の文末詞へと変化しているのである。

上記のことを主張するためには、宇和島市方言として使用される「ヤ」の用法や使用実態についても記述する必要がある。そのため、本章では「ヤ」の用法を記述した上で、「ヤ」が生起する文タイプを明らかにするために行った現地調査について述べる。

本稿で記述対象とする「ヤ」は以下のようなものである。ただし、共通語訳は近似的なものに過ぎず、必ずしもニュアンス等が一致しているわけではない。

- (105) 松山に行こうヤ。(行こうよ)
- (106) ご飯食べさいヤ。(食べろよ)
- (107) もう泣きさんなヤ。(泣くなよ)

5.1 「ヤ」の先行研究

まずは「ヤ」の先行研究を確認する。宇和島市方言の「ヤ」の記述としては、国村三郎(1956)、武智正人(1957)、杉山正世(1959)などがある。また、宇和島市方言に限定されてはいないが宇和島市を含む南予地方の方言として「ヤ」の記述が見られる藤原与一(1982)も参考になると考えられるため、それぞれの記述を確認しておく。

5.1.1 国村三郎(1956)の記述

国村三郎(1956)の記述のうち、「ロ」と「ハ」の用法では筆者も使用できるが、疑問文に生起する「イ」の用法では使用できない。高年層の使用が中心になっていると感じる(下線は筆者による)。

イ、反語的な意を示す。

ナニヤー、ナマイキナコトーユーナ。(何だッ生意気なことをいうな。)

イカンヤ。(行かない?なぜ)

ロ、誘引的な意を示す。

エオカコーザ。(絵をかかないか。)

オヨゴーザ。（泳がないか。）
ハ、懇願の意を示す。
シテクレーザ。（為て下さいな。）

5.1.2 武智正人（1957）の記述

武智正人（1957）は「テヤ」の先行研究として「3.1 「テヤ」の先行研究」でも紹介したものである。ここには「ヤ」について以下のように記述されている（下線は筆者による）。

ヤ か 行くヤ?、行かんヤ?
ワイヤ わしも行かヤ、知つとらヤ
よ 食べヤ、下さいヤ

記述に基づくと、「ヤ」は疑問文や命令文と生起し、平叙文とも生起しているように見える。しかし、詳しくは後述するが「ヤ」は単独で平叙文に付加するのではなく、「-a」を伴って前接語と音融合を起こしていると考えられる。これは「ワヤ」（武智正人（1957）では「ワイヤ」という形式に由来する文末詞であると推測されるため、以降本稿では「-a+ヤ」と表記し、単独で使用される「ヤ」の用法とは考えないこととする。

筆者の内省では「ヤ」は命令文専用の文末詞であるため、疑問文では文法的に違和感があり使用できない（武智正人（1957）でも「行くヤ?、行かんヤ?」の例は宇和島市での使用は確認できなかったようである）。しかし、命令文といつてもここで挙げられているような動詞の連用形に付加する際は「ヤ」の前に長音が付加されて「食べーヤ」のように使用するため、長音がない場合（「食べヤ」）はやや不自然に感じる。また、「下さいヤ」のように丁寧体に付加する用法も筆者は文法的に違和感があり使用できない。

5.1.3 杉山正世（1959）の記述

杉山正世（1959）も「テヤ」の先行研究として参照したが、「ヤ」の記述も確認できたため再度参照する。ここで述べられていることは国村三郎（1956）とほぼ一致している。繰り返し述べたとおり、筆者は「ヤ」を②や③のような命令文で使用することはできるが、①のように疑問語と生起させて詰問や反語のニュアンスで使用することはできない（下線は筆者による）。

①不確かな意の語や逆態表現法に続き、詰問・促しをあらわす。「何ヤ、もいちど言うてみい」「早よせんかヤ」②意志表出態に続いて勧奨の意を示す。「早よ行てヤ」③命令形に続いて勧奨の意をあらわす。「しゃんとせいヤ」「ちょっと待ちなれヤ」

5.1.4 藤原与一（1982）の記述

藤原与一（1982）では南予地方で使用される「ヤ」として以下のように記述されている（下線は筆者による）。

南予の南端部では、

○アソボー ャー。（あそぼうよ。）

などの言いかたがあつて、これは「アソボー ョー。」よりもていねいな言いかただといふ。「ヤー」とはつきりよびかけて、その対他的な効果が、「ヨー」のばあいよりも品位にとんでいるとするのは、まさに推測をゆるさない、地方の言語感情である。

（中略）

南予内に、「よ」とでも言いかえてみたい「ヤ」がある。南予南端部では、

○イク トコガ アリヤ セナ ャ。（行く所がありはしないよ（しないさ）。）

などと言っている。同地域でまた、

○オゴラレト ャー。（おごられたよ。）

のようにも言っている。（土地の人は、“「ヤー」は人に言う時の語調だ。”と言っている。）南予内の北部の二例は、

○ドー イタシマシテ ャ。（どういたしまして。「いつもおせわになります。」の返事）

○コレワ オイシ ャー。（これはおいしいよ。）

である。

冒頭の「アソボー ャー」のように命令文<勧誘>で使用することは筆者にとっても自然である。また、「ヨ」を使用するよりも「ヤ」の方が丁寧という記述内容も南予地方出身の筆者としては同意できる。一方で、中略以降に列挙される用例¹³のように「ヤ」を使用することは文法的にやや不自然に感じる。

以上、「ヤ」の先行研究について概観した。以降はこれらの記述内容と筆者の内省などに基づいて「ヤ」の用法を記述する。

5.2 「ヤ」の形式的特徴

ここからは、「ヤ」の形式的特徴について記述する。基本的には筆者の内省に基づいて記述するが、高年層が使用する「ヤ」については筆者の観察や先行研究などを基にする。

5.2.1 「ヤ」の前接要素・後接要素

まずは「ヤ」の前接要素について述べる。なお、武智正人（1957）や藤原与一（1982）では「ヤ」に対応する形式として「よ」が挙げられていたため、共通語の「よ」とほぼ同じ振る舞いをすると思われる宇和島市方言としての「ヨ」と比較しながら記述する。

- (108)a. もうそろそろ寝る { *ヤ / ヨ }。(動詞述語：終止形)
 b. もうそろそろ寝ろ { ヤ / ヨ }。(動詞述語：命令形)
- (109)今日は本当に暑い { *ヤ / ヨ }。(形容詞述語)
- (110)本当に綺麗 { ??ヤ / *やヤ / ヨ / *やヨ }。(形容動詞述語)
- (111)明日の試合は多分中止 { ??ヤ / *やヤ / ヨ }。(名詞述語)
- (112)昨日は図書館に行ったん { ??ヤ / *やヤ / ヨ }。(ノダ文)

動詞述語では「ヨ」が終止形でも命令形でも使用できるのに対して、「ヤ」は終止形においては使用できない（これは活用形の問題というより文タイプの問題である）。また、形容詞述語でも「ヨ」は使用できるが「ヤ」は使用できない。形容動詞述語・名詞述語・ノダ文については「ヤ」を使用できるか判断が揺れている。宇和島市方言では伝統的なコピュラは「じや」だが、若年層では「や」になっているため、本稿で記述対象としている文末詞の「ヤ」と字面の上で違いが分かりづらくなっている。

また、コピュラとしての「や」が前接する場合は明らかに違和感があるため、「ヤ」を使用できない。これは「2.3.4 その他の文末詞」で述べた文末詞「ヨ」を文に付加する場合、愛媛県ではコピュラを生起させない傾向にあることと連続的であると思われる。以上、前接要素のみを概観すると「ヨ」はコピュラが前接しなければいずれも使用できるのに対して、「ヤ」は動詞述語の命令形でしか使用できず、随分と使用される範囲が異なっていることが分かる。

次に後接要素について述べる。「ヤ」は共通語の「ね」に相当する「ナ」・「ネ」（いずれも長音が後接する場合がある）が後接可能だが、その他の文末詞は後接しない。この点は「ヨ」も同様である。

- (113)もうそろそろ寝ろヤ { ナ / ネ / *ヨ / *ゾ }。
 (114)もうそろそろ寝ろヨ { ナ / ネ / *ヤ / *ゾ }。

ちなみに、「ヨ」（共通語の「よ」も同様）の場合、相互承接の順を入れ替えて「ネヨ」（「ねよ」）とすることは文法的に不適格となるのだが、「ヤ」の場合、順を入れ替えた「ネヤ」という形式を使用した用例をいくつかの先行研究から見つけることができた。筆者は「ネヤ」を使用しないが、観察するところによると現在でも中年層・高年層の男性を中心に使用されている形式である。

- (115)ひどいネヤ。(ひどいなあ) (武智正人 (1957))
 (116)行くネヤ。(行くね) (篠崎充男 (1987))

この「ネヤ」については、意味が単独の「ネ」と同様であると思われることから、「ネ」

に単独の「ヤ」が後接した複合文末詞と見るのでなく、「ネ」の異形態の1つであると考えるのが適当であると思われる。藤原与一（1997）にも「ネヤ」について、「ネの訴えかけをより顕明にしようとして、人々はしぜんに、〔ne〕音に〔a〕音を加えた。発音したいで、この〔a〕はしぜんに大きい〔a〕にもなり、〔neja〕の発音がなされるようにもなった」とある。同書によると、「ネヤ」は愛媛県のみならず四国を含む主に西日本全域で使用が見られる形式のようである。

5.2.2 「ヤ」が生起する文タイプ

続いて、「ヤ」が生起する文タイプについて記述する。ここでも比較のため、「ヨ」を併記して記述を進める。

- (117)起きる { *ヤ／ヨ}。（平叙文）
- (118)松山に行こう {ヤ／ヨ}。（行こうよ）（命令文：<勧誘>）
- (119)ご飯食べさい {ヤ／ヨ}。（食べろよ）（命令文：<命令>）
- (120)もう泣きさんな {ヤ／ヨ}。（泣くなよ）（命令文：<禁止>）
- (121)明日雨降るか { *ヤ／ヨ}。（真偽疑問文：<疑問>）
- (122)いつ言ったか { *ヤ／ヨ}。（疑問語疑問文：<疑問>）

筆者の内省に基づくと、「ヤ」は命令文では使用できるが、平叙文・疑問文では使用できない。この点、「ヨ」は平叙文でも使用することができるため両者は生起する文タイプの観点から見ても同様のものであるとは言い難い。

なお、疑問文において「ヨ」は詰問や反語の文脈で使用することができるが、「ヤ」は筆者の内省では文法的に違和感があり使用できない。ただし、先行研究の記述を確認したところ、先行研究では「ヤ」が疑問文に付加する用例も見られる。

- (123)何ヤ、もいちど言うてみい。（疑問語疑問文：<詰問>）
- (124)早よせんかヤ。（否定疑問文：<命令>）（いづれも杉山正世（1959））

また、(117)で「ヤ」は平叙文には付加しないことを示したが、以下のような形式で「ヤ」が平叙文で使用されたように見える用例も先行研究から確認することができる。

- (125)わかった、じきにいかヤ。（分かった、もうすぐ行くよ。）
- (126)会もすんだのにまだおらヤ。（会も済んだのにまだいるよ。）
(いづれも吉田町・吉田町教育委員会（1983）)

しかし、これらは既に述べたとおり、実際は前接語に「-a」を付加して音融合を起こした

ものに「ヤ」が付加しているのである。これらは「ワヤ」という形式に由来するものだと考えられ、「ヤ」が直接動詞の終止形に付加しているわけではないということに注意が必要である。この点に加えて、先述した前接要素も「ヨ」の振る舞いとは大きく異なることから、現時点では宇和島市方言の「ヤ」を共通語の「よ」に相当するものであると断定することは難しく、判断は保留しておく。

5.3 「ヤ」の意味機能

ここからは「ヤ」の意味機能について述べる。なお、先行研究には疑問文に付加して、詰問や命令の文脈で使用されている用例も確認できるが、筆者の内省では「ヤ」を疑問文で使用することは文法的に違和感があり、疑問文で使用される「ヤ」がどのような発話態度を表すのか内省に基づいて記述することが容易ではない。そこで、本稿では筆者の内省が及ぶ命令文で使用される「ヤ」の意味機能についてのみを記述する。記述の際は文末詞を何も付さない形式（「φ」）と、「ヤ」に上昇イントネーションが伴う形式（「ヤ↑」）、下降イントネーションが伴う形式（「ヤ↓」）とを適宜比較しながら記述を進める。

筆者の内省では、<勧誘>・<命令>・<禁止>のいずれにおいても「ヤ↑」および「ヤ↓」を使用することができる。

(127) 松山に行こう {φ／ヤ↑¹⁴／ヤ↓}。（命令文：<勧誘>）

(128) ご飯食べさい {φ／ヤ↑／ヤ↓}。（命令文：<命令>）

(129) もう泣きさんな {φ／ヤ↑／ヤ↓}。（命令文：<禁止>）

「φ」を付加した場合、単純に前接する命題を聞き手に伝えることになる。平叙文は聞き手に向けて用いると、主に情報や話し手の判断を伝える目的で発話されるが、(130)などは場合によっては独り言としても使用できる文である。一般的に独り言として発話する場合は聞き手目当て性のある文末詞を使用しないことが多い。

(130) (雨が降っていることに気がつき独り言を言うとき)

あ、雨だ {φ／？よ}。

しかし、命令文は聞き手に動作の実行を誘ったり指示したりする文タイプであり、文末詞を使用しなくとも聞き手に向けた発話として使用できる。

(131) (真面目に取り組まない友人に文句を言うとき)

ちゃんとやれ {φ／よ}。

話を「ヤ」に戻す。まず、「ヤ↑」を付加した場合についてだが、このような場合、話し

手が伝達したことを実行に移すかどうかは聞き手の判断に委ねられていることが多い。言い換えると、話し手にとっては是が非でも当該行為を聞き手に実行させようとしているわけではなく、「実行した方がいい」という意味合いで聞き手に促していることを示す。例えば、(128) の「食べさいヤ↑」は聞き手に食事をすることを促している場面だが、聞き手の意に反してまで食事を強要しているわけではなく、「よかつたら食べて」という程度で聞き手に勧めるときに使用される。

一方で、「ヤ↓」を付加した場合、話し手は聞き手に指示内容の再認識や実行を要求していることを示す。具体的には、話し手が既に 1 度聞き手に伝達したにもかかわらずそれが実行されていなかつたり、社会通念上の共有知識（＝常識）から反するような行動を聞き手がしたりする際に使用する。例えば、(128) の「食べさいヤ↓」は食事の支度が整っていることを 1 度聞き手に伝えたはずなのに一向に食べに来ないようなときに、「後片付けが遅れるから早く食べて」というような意味合いで聞き手に指示内容の再認識や実行を強く促すときに使用される。

「ヤ↑」および「ヤ↓」を付加した場合について記述したが、「ヤ↓」は共通語の「よ↓」の意味機能とほぼ類似するもののように思われる（共通語の「よ」については井上優（1993）、蓮沼昭子（1997）を参照）。例えば、蓮沼昭子（1997）では以下のような用例を示して、命令文に生起する「よ↓」の意味機能を「聞き手に対する指示内容の再認識の要請、誤解の修正要求」と規定している。これらは、いずれも「ヤ↓」と置換しても差し障りがないと考えられる（筆者の内省では「ヤ↓」は丁寧体には付加させづらいが、同じ文脈でも普通体であれば問題なく「ヤ↓」を使用できる。なお、「ヤ↑」の文法性判断は筆者による）。

(132) たまには、掃除ぐらい手伝って {ヤ↓／よ↓}。

(133) レポートは、ちゃんと期限どおりに出してください {??ヤ↓／よ↓}。

(134) 遠慮せずに、召し上がってください {??ヤ↓／よ↓}。

（いずれも蓮沼昭子（1997）を参考）

しかし、「ヤ↑」は「よ↑」とは一致しないように思われる。同じく蓮沼昭子（1997）を参照すると、「よ↑」について以下のようない例を示した上で、「聞き手がその場で指示されると同時にを行うべき動作を指示するのではなく、一般常識としてとるべき行動、あるいは未来においてとるべき行動の指示」を伴う命令になるとしている。このような記述をまとめて、「よ↑」の意味機能を「聞き手に対する指示内容の理解の要請」と規定している（例文の「ヤ↑」の文法性判断は筆者による）。

(135) おばあちゃんのところではお行儀よくしなさい {??ヤ↑／よ↑}。

(136) 途中、自動車に気をつけて歩きなさい {??ヤ↑／よ↑}。

(137) このこと、絶対に人に言うな {??ヤ↑／よ↑}。

(138) 今晚、必ず電話して {??ヤ↑／よ↑}。

(139) 遠慮せずに、召し上がってください {??ヤ↑／よ↑}。

(いざれも蓮沼昭子 (1997) を参考)

「よ↑」が適格となる文に「ヤ↑」を付加すると、非文とまでは言えないがやや違和感があつて使用しづらい。丁寧体に付加すると違和感があるのは先述したとおりであるが、普通体に付加している (137) や (138) でも「ヤ↑」は違和感がある。蓮沼昭子 (1997) が述べるように「よ↑」は「その場でとるべき行動を指示しているものではなく、近い将来にとるべき行動を予め言い聞かせておくといった発話」になるのだろうが、「ヤ↑」は (140) のようにその場で行動を指示する際にも用いることができる。この場合、筆者の内省では「ヨ↑」(「よ↑」) は不自然である。

(140) (自宅にやってきた聞き手にお菓子を食べるよう言うとき)

よかつたら、これ食べさい {ヤ↑／??ヨ↑}。

また、先述したように「ヤ↑」を使用する場合は「実行した方がいい」と聞き手に促し、判断は聞き手に委ねていることを示す。そのため、(137) の「絶対」、(138) の「必ず」、(139) の「遠慮せずに」など話し手が半ば強制的に聞き手に行為を実行するよう伝達する際は、「ヤ↑」は不自然になるのだと考えられる。

ちなみに、筆者の観察するところによると、疑問文において「ヤ」を付加する場合は「ヤ↓」での使用が大半であるように思われる。稀に聞き手からの発話に対する問い合わせとして「ヤ↑」を耳にすることもあるが、詰問や命令の文脈で使用される際は「ヤ↓」である。

以上のことから、「ヤ」は共通語の「よ」の振る舞いと一致する部分もあるが、一致しない部分も複数確認できるため、「よ」の意味記述を全面的に当てはめて考えることは不適切だと考えられる。上記のことをふまえて、本稿では「ヤ↑」と「ヤ↓」の意味機能を以下のように規定しておく。そこから、イントネーションにより付加される機能を除いた「ヤ」自体の意味機能も下記のようにとして仮定しておく¹⁵。

【「ヤ↑」の意味機能】

指示内容について実行するかどうかは聞き手に判断を委ねていることを示す。

【「ヤ↓」の意味機能】

聞き手に指示内容の再認識や実行を促していることを示す。

【「ヤ」の意味機能】

命題内容を聞き手に向けて発話しているということを示す。

5.4 世代別による「ヤ」の使用実態

ここまで繰り返し述べてきたとおり、筆者の内省では「ヤ」は命令文専用の文末詞なのであるが、先行研究からは疑問文と生起して詰問や命令などの文脈で使用されている用例も確認できる。このことから、現在「ヤ」が生起する文タイプには若年層と高年層とでは異なる可能性があるため、現地での聞き取り調査を行った。なお、イントネーションに関しては特に世代差は生じていないと考え、調査の際も追究しなかったため、以降は特別な場合を除き、単に「ヤ」と表記する。

以下に調査概要と調査結果を述べる。また、本章の冒頭でも述べたとおり、若年層において「テヤ」が命令文で使用しづらくなっている現象にも「ヤ」が命令文専用の文末詞として定着していることが影響していると考える。後に調査結果をふまえて、「テヤ」と「ヤ」の関係性についても考察を加える。

5.4.1 調査概要

調査は面談による聞き取り形式で行った。回答者は宇和島市で6歳から12歳までの期間を過ごした人とし、若年層（20代）10人（男女5人ずつ）と高年層（60代～90代）10人（男女5人ずつ）を対象にした。以下の調査項目を筆者が口頭で伝え、使用するか否かを尋ねた。調査期間は2018年8月から10月までで、調査項目は以下のとおりである。

- ・調査項目

(平叙文)

もうそろそろ寝るということを伝えるとき

そろそろ寝るヤ。

(命令文：<勧誘>)

買い物で松山に行こうと誘うとき

ねえ、松山に行こうヤ。

(命令文：<命令>)

帰宅した人に夕飯を食べるよう促すとき

おかげり。ご飯食べさいヤ。

(命令文：<禁止>)

泣いている友人を慰めるとき

もう泣きさんなヤ。

(真偽疑問文：<疑問>)

明日学校があるのか尋ねるとき

明日学校あるかヤ。

(否定疑問文：<命令>)

出かける準備が終わらない人を催促するとき

はよせんかヤ。

5.4.2 調査結果と考察

調査結果は表 6 のとおりである。

表 6 : 「ヤ」に関する聞き取り調査の結果

回答者	叙述	「ヤ」が生起する文タイプ				疑問 (真偽疑問文)	命令 (否定疑問文)
		命令文			禁止		
		勧誘	命令				
若M03	×	●	●	●	●	◇	●
若M01	◇	●	●	●	●	◇	◇
若M05	×	●	●	●	●	×	◇
若M12	×	●	●	●	●	◇	◇
若F02	×	●	●	●	●	◇	◇
若F03	×	●	●	●	●	◇	◇
若F05	×	●	●	●	●	◇	◇
若F12	×	●	●	●	●	×	◇
若M11	×	●	●	●	◇	×	◇
若F11	×	●	●	●	◇	◇	◇
高M11	×	●	●	●	●	●	●
高F01	×	●	●	●	●	●	●
高M01	×	●	●	●	●	×	●
高M03	×	●	●	●	◇	×	●
高M13	×	●	●	●	◇	×	●
高F12	×	●	●	●	●	×	●
高M12	×	●	●	●	●	◇	◇
高F03	×	●	●	●	●	×	◇
高F11	×	●	●	●	●	◇	◇
高F13	×	●	●	●	●	×	◇

<凡例>

- …問題なく使用できる
- ◇…理解できるが使用しない
- ×…使用できない

<回答者記号>

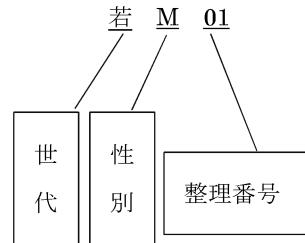


表 6 より、命令文では世代にかかわらずほぼ全員が問題なく「ヤ」を使えると回答している。<禁止>で若干名理解できるが使用しないと回答した人がいるが、これは「ヤ」の問題ではなく、いずれも「泣きさんな」という方言形の動詞を使用しないためであることを確認した¹⁶。これらのことから、「ヤ」は世代を問わず命令文で問題なく使用されていることが分かる。

一方、疑問文は<詰問>については高年層で問題なく使えるとした人が一定数見られるが、若年層では理解できるが使用しないと回答した人が大半を占めた。なお、平叙文ではほぼ全員が使用できないと判断している。

5.5 「テヤ」と「ヤ」の関係性

現地調査の結果より、「ヤ」は若年層においては命令文専用の文末詞として定着しているということが分かった。それでは、「ヤ」に生じているこの現象と「テヤ」が命令文で使用しづらくなっている現象はどのように関係しているのだろうか。

「テヤ」は先述したとおり、発話の引用形式「と言やあ」に由来する文末詞であるため、「と言やあ」という形式の時点ではいずれの文タイプにおいても使用することができていた形式だと推測される。しかし、「テヤ」の文法化により徐々に発話の引用形式としての機能が希薄化し、話し手の発話態度を表す文末詞となった「テヤ」は 4 章で述べたように、平

叙文においてプロトタイプな意味用法から拡張した談話展開上の意味用法を複数獲得した。これは「テヤ」が「話し手がどのような認識を持っているか」・「それをどのように聞き手に伝達するか」という点において、表現法を豊かにしたと言える。

しかし、一般的に疑問の文脈で発話される疑問文では命題に対して話し手の判断は成立しておらず、命令文も聞き手に行行為の実行を求めたり実行されなかったときに非難したりする文タイプである。そのため、このような「テヤ」の用法変化により各文タイプの性質と「テヤ」が表現し得ることが合致しなくなり、使用に違和感が生じるようになったと考えられる。結果として、発話の引用形式としての機能が希薄化したことで疑問文では世代を問わず「テヤ」を使用しなくなり、呼びかけでの使用も現在は高年層のみに留まっている。そして、現在「テヤ」を使用できるか否か判断が揺れている命令文も上記の「テヤ」の用法変化により、使用に違和感を抱かれるようになっているのである。

さて、表 6 からは高年層の一部は命令文に加えて疑問文＜命令＞でも使用している一方で、若年層は命令文に使用が偏っていることがうかがえる。つまり、若年層においては「ヤ」が命令文専用の文末詞として定着していると言える。「テヤ」と「ヤ」は出自が異なるため、表現し得る発話意図などが必ずしも一致するわけではないが、「ヤ」が「テヤ」と代替可能な形式として定着していることは「3.4 「テヤ」が生起する文タイプに関するアンケート調査」で示した調査結果（図 3・図 4・図 5・図 6）で命令文において「テヤ」ではなく「ヤ」を使用する割合が全世代で高かったことからも指摘できる。

したがって、若年層において「テヤ」が命令文で使用できなくなるという現象は代替可能な形式としての「ヤ」の定着により、「テヤ」の通時的な変化に拍車をかけたものと考えられる。その結果、とりわけ若年層において命令文では「ヤ」を、平叙文では「テヤ」を使用するという棲み分けがなされるようになったのである。言い換えると、「テヤ」の通時的な変化は「ヤ」のような代替可能な形式があったからこそ起こった変化であり、代替可能な形式が存在しないような状況で突然変化するということは考えにくい。

5.6 5章のまとめ

5章では「テヤ」の命令文における世代差の要因の1つとして、「ヤ」が命令文専用の形式として定着したことが間接的に影響しているということを述べた。ただし、繰り返しになるが、「テヤ」が命令文で使用されなくなっていることの直接の原因が「ヤ」であるということを主張しているわけではない。

あくまでも、「テヤ」が発話の引用形式から話し手の発話態度を表す文末詞へと変化したことで、これまで生起していた平叙文以外の文タイプと「テヤ」の性質とが合致しなくなったことが直接的な原因である。つまり、「ヤ」が命令文専用の文末詞として定着したことで、「テヤ」が平叙文専用の文末詞へと変化しても、命令文において代替可能な形式が存在することになり、「テヤ」の用法変化が促進されたと考えられるのである。

第6章 [ずれの表明] における世代差の要因

前章では命令文における「テヤ」の世代差の要因として、同じ宇和島市方言の「ヤ」と関連付けながら記述した。本章では「テヤ」の談話展開上の意味用法の1つ、[ずれの表明]に生じる世代差の要因を明らかにしていく。前章同様に結論から先に述べると、若年層が「ワ」という文末詞を新たに使用するようになったことで、[ずれの表明]において「テヤ」と「ワ」が競合する状況になり、結果若年層では「テヤ」が使用されなくなっているのである。以下、「ワ」および「ワ」に関連する形式の「ワイ」、さらに「ワイ」に由来し前接語に「-a+イ」を付加して音融合を起こす形式（以下「-a+イ」）、以上3形式の用法や使用実態について記述し、「テヤ」との関係性を考察する。

本稿で記述対象とする「ワ」は以下のようなものである。ちなみに、この「ワ」は男女問わず使用することができるもので、主に女性が使用するとされている上昇イントネーションをとる「わ」¹⁷とは異なっている。

- (141)今日はそろそろ寝るワ。(寝るよ)
- (142)分かった、先生に連絡しとくワ。(連絡しておくよ)
- (143)お、ここのかレー美味しいワ。(美味しいな)

6.1 「ワイ」および「-a+イ」の先行研究

まずは、「ワイ」および「-a+イ」の先行研究について概観する。なお、本稿で記述対象とする「ワ」は比較的新しい文末詞であるのか、管見の限り宇和島市方言としての「ワ」の記述は見当たらない。なお、国村三郎（1956）や杉山正世（1959）、宇和島市で収録した談話データを文字起こしした篠崎充男（1987）などを参照すると「ワイ」、「-a+イ」に由来する「ライ」や「イ」などの記述や用例は確認できる。まずは「ワイ」について杉山正世（1959）と篠崎充男（1987）の記述を引用する。

- ワイ ①未来表現態に続いて意志をあらわす。「わしから言うて聞こうワイ」②終止形
に続いてその意を強める。語末に「る」音があるものは融合する。「私がして上げ
ライ」「僕も知っとライ」（九島では、上接音と融合せずにバイとなっている。「わ
しがするバイ」「わしにや出来んバイ」）(杉山正世 (1959))
- ワイ 「降るワイ」「行くワイ」などが「降ル+ワイ」で「降ライ」、「行ク+ワイ」で
「行カイ」となる。(篠崎充男 (1987))

なお、筆者の内省では杉山正世（1959）でいう②の用法は現在でも問題なく使用できる。しかし、意向形による意志文に生起する①の用法は理解できるが使用しない。松山市出身

の若年層話者（20代男性）¹⁸に確認したところ、①のように「ワイ」を意向形による意志文に生起させる用法を現在でも使用することだが、筆者の観察では宇和島市で①のように「ワイ」が使用されることはないように感じる。愛媛県内であっても用法に地域差が生じている可能性があるが、地域差の観点からの分析は本稿では触れずに今後の課題としておく。

次に、藤原与一（1986）に見られる「-a+イ」の記述を確認しておく。なお、藤原与一（1986）は本稿でいう「-a+イ」のことを「ワイ」が「陰在」（「伏在」とも）したものであると解釈している。本稿でも同様の立場をとって記述を進める。

愛媛県下には、「～ぬ ワイ」の「～ナイ」の聞こえもさることながら、「～まする ワイ」の「～マスライ」の聞こえが、中部以南にいちじるしい。「上げる」の下に「ワイ」がくれば「アゲライ」ができる。「～でする ワイ」は「～デスライ」になる。「～なさる ワイ」は「ナサライ」になる。これらがやはり「ライ」の聞こえも示すので、愛媛県中部以南では、「ライ」がひじょうによく聞かれる結果になっている。そのうち「デスライ」などのはあいは、今日の語感からして「デス」と「ライ」とを切りはなすことができるので、人は「ライ」を文末の特別のことばと思いがちである。

(藤原与一 (1986))

以上、「ワイ」および「-a+イ」の先行研究について確認した。「6.2 「ワイ」および「-a+イ」の用法」では宇和島市方言として使用される「ワイ」および「-a+イ」の用法を、「6.3 「ワ」の用法」では主に宇和島市の若年層が使用する「ワ」の用法を筆者の内省や先行研究を基に記述する。

6.2 「ワイ」および「-a+イ」の用法

ここでは「ワイ」および「-a+イ」の用法について記述する。先述のとおり、「-a+イ」という形式は「ワイ」が陰在したものだと考えられるため基本的には同時に記述を進めるが、必要に応じて両者を分けて考えることもある。

6.2.1 「ワイ」および「-a+イ」の前接要素・後接要素

まずは、「ワイ」および「-a+イ」の前接要素について述べる。なお、伝統的な宇和島市方言では形容動詞の終止形が「な」になるとされている（工藤真由美・八亀裕美（2008））ため、現在の若年層が使用する「や」を終止形にとる形容動詞とは区別して記述する。

名詞文ではコピュラの有無にかかわらず、「ワイ」および「-a+イ」は文法的に不適格である。また、「-a+イ」は音融合する際の形式であるため、「アイ」にしかならないものについては記載しない。

(144) 今日はそろそろ {寝るワイ／寝ライ}。(動詞述語)

(145)a. 今日は本当に暑いワイ。(形容詞述語：現在形)

b. 昨日は本当に {暑かったワイ／暑かつタイ}。(形容詞述語：過去形)

(146)a. お姉さんはよいよ {??元気やワイ／*元気ヤイ}。(形容動詞述語)

(「よいよ」は「とても」の方言形)

b. お姉さんはよいよ {?元気なワイ／?元気ナイ}。(形容動詞述語：方言形)

(147) 明日の試合は多分 {*中止ワイ／*中止やワイ／*中止ヤイ}。(名詞述語)

(144) は動詞述語で「ワイ」および「-a+イ」を問題なく使用できる。(145a) のような形容詞の現在形に「-a+イ」は生起しないが、「ワイ」は問題なく使用できる。一方で、(145b) のように過去形になると「-a+イ」も使用可能となる。また、(146a) のように終止形が「や」の形容動詞述語では「-a+イ」は文法的に不適格となるが、「ワイ」は文法的にやや違和感がある。(146b) のような伝統的な宇和島市方言の形容動詞述語になると、筆者は使用しないが中年層・高年層の話者が使用しても違和感のない表現になる。(147) の名詞述語では「ワイ」および「-a+イ」はいずれも文法的に不適格である。

また、「ワイ」および「-a+イ」は他の文末詞には後接しない。

(148) 今日はそろそろ寝る {*ナ／*ネ／*ヤ／*ヨ／*ゾ} ワイ。

次に、後接要素について述べる。「-a+イ」は共通語の「ね」に相当する「ナ」・「ネ」が後接すると、会話の聞き手に同意を求める意味合いになる。ただし、「ワイ」に「ナ」・「ネ」を付加すると文法的にやや違和感があり使用しづらい。

(149) (少年時代を振り返って話すとき)

a. あの頃はよく野球しよっタイ {ナ／ネ／*ヨ／*ゾ}。

b. あの頃はよく野球しよったワイ {??ナ／??ネ／*ヨ／*ゾ}。

6.2.2 「ワイ」および「-a+イ」が生起する文タイプ

筆者の内省では「ワイ」および「-a+イ」は平叙文にのみ生起し、命令文や疑問文とは文法的に不適格となるため使用することができない。なお、先述のとおり先行研究には意向形による意志文に生起する「ワイ」が確認できるが、現在宇和島市方言ではほとんど使用されていない用法であると思われる。筆者の内省でも、意味は理解できるが周囲で使用している人を滅多に見かけないためわざわざ使用することはない。

ちなみに、意向形に生起する場合でも聞き手を誘う命令文＜勧誘＞として「ワイ」および「-a+イ」を使用することはできず、必ず話し手の意志を述べる際に使用される。

- (150) 今日はそろそろ {寝るワイ／寝ライ}。(平叙文)
- (151)一緒に買い物 {?行こうワイ／?行こワイ}。(意志文)
- (152)一緒に買い物 {*行こうワイ／*行こワイ}。(命令文：<勧誘>)
- (153)はよ {*しろワイ／*しライ}。(命令文：<命令>)
- (154)もう {*泣くなワイ／*泣くナイ}。(命令文：<禁止>)
- (155)明日雨 {*降るかワイ／*降るカイ}。(真偽疑問文：<疑問>)
- (156)いつ {*言ったかワイ／*言ったカイ}。(疑問語疑問文：<疑問>)

6.2.3 「ワイ」および「-a+イ」の意味機能

ここでは「ワイ」および「-a+イ」の意味機能について述べる。基本的には「ワイ」も「-a+イ」も同じ意味機能を持つと考えて支障はなく、いずれも話し手の意志や知識を聞き手に提示するときに使用する。

- (157) (体調がすぐれず早めに寝ることを家族に伝えるとき)
ちょっとしんどいけん、今日は早めに {寝るワイ／寝ライ}。
- (158) (雨が降ってきたことを隣にいる友人に伝えるとき)
あー、いけん。雨降って {きたワイ／きタイ}。

ただし、「ワイ」および「-a+イ」は強制力を持って当該命題を導入するほど聞き手に働きかける効果はなく、あくまでも認識するよう提示する程度に留めることを示すと考えられる。宇和島市方言の「ヨ」(共通語の「よ」に相当)と比較すると、「ヨ」は聞き手に強制的に伝達内容を導入させようとする場面でも使用できるが、「ワイ」および「-a+イ」はそのような場面ではやや違和感があり使用しづらくなる。

- (159) (朝仕事に出掛ける前に家族に挨拶をするとき)
A : それじゃ、行って {くるワイ／くライ／くるヨ}。
B : はーい、気をつけてね。
- (160) (朝仕事に出掛ける前に家族に挨拶をするとき)
A : それじゃ、行って {くるワイ／くライ／くるヨ}。
B : (家族はテレビに夢中で反応しない。)
A : 聞いとるなんか。行って {??くるワイ／??くライ／くるヨ}。
B : あ、ごめんごめん。行ってらっしゃい。

また、「ワイ」および「-a+イ」は(161)のように使用して聞き手を突き放すニュアンスを含めることも可能である。

(161) (親からゲームをやめるように言われて苛立ちながら返事をするとき)

A：さつきからずっとゲームしよるけど、宿題をやりなさい。

B：うるさいなあ、{分かつとるワイ／分かつとライ}。

ただし、宇和島市方言の「ワイ」および「-a+イ」に常時聞き手を突き放すニュアンスが含まれるのではなく、あくまでも文脈に依存する部分が大きいと考えられる¹⁹。

なお、野間純平（2012）では大阪方言の「ワイ」を、同じ大阪方言の「ワ」と関連付けて記述している。野間純平（2012）では大阪方言の「ワ」には当該命題が「話し手の領域にとどまっている」ことを示す意味機能があることから、「あくまで自分のことだ」というような聞き手を突き放すニュアンスが生じ得ると記述されている。そして「ワイ」は独り言で使用できないことを根拠に、「ワ」に「イ」を付加することで「ワ」の「聞き手目当て性を強める」と説明している。

(162) (雨が降ってきたことに気が付いて独り言を言うとき)

あ、雨が降ってきた {ワ/#ワイ}。(野間純平 (2012))

(163) (雨が降ってきたことに気が付いて独り言を言うとき)

あー、もう疲れた {ワ/#ワイ}。(野間純平 (2012))

上記のことは宇和島市方言の「ワイ」および「-a+イ」にも当てはまり、「ワイ」および「-a+イ」はいずれも独り言で使用することはできない。

(164) (雨が降ってきたことに気がつき独り言を言うとき)

あ、雨が降って {#きたワイ/#きタイ}。

以上のことから、「ワイ」および「-a+イ」の意味機能は以下のようにまとめることができる。

【「ワイ」および「-a+イ」の意味機能】

「ワイ」および「-a+イ」は聞き手が知らないと思われる話し手の意図や知識を提示する際に用いられるが、当該命題を強制的に導入するほど聞き手に働きかける効果はなく、認識することを期待して提示する程度に留めることを示す。

6.3 「ワ」の用法

続いて、主に若年層が使用する「ワ」の用法を記述する。

6.3.1 「ワ」の前接要素・後接要素

まずは、「ワ」の前接要素について述べる。「ワ」は動詞述語、形容詞述語、形容動詞述語、名詞述語（コピュラが無い場合は不適格）のいずれにも使用できる。ただし、伝統的な宇和島市方言の形容動詞述語で「ワ」が使用されると文法的に違和感がある。

- (165)今日はそろそろ寝るワ。(動詞述語)
- (166)a.今日は本当に暑いワ。(形容詞述語：現在形)
b.昨日は本当に暑かったワ。(形容詞述語：過去形)
- (167)a.相変わらず田中くんは元気やワ。(形容動詞述語)
b.??相変わらず田中くんは元気なワ。(形容動詞述語：方言形)
- (168)明日の試合は多分 {*中止ワ/中止やワ}。(名詞述語)

また、「ワ」は他の文末詞には後接しない。

- (169)今日はそろそろ寝る {*ナ/*ネ/*ヨ/*ゾ/*ワイ} ワ。

次に、「ワ」の後接要素について述べる。「ワ」に「ナ」・「ネ」が後接すると、会話の聞き手に同意を求める意味合いになる。また、「ヨ」が後接すると聞き手に有無を言わせず話し手の意向を伝える意味合いになる。ただし、「ネ」と「ヨ」はやや共通語的かつ女性的であるため筆者は使用しない。

- (170)今日はそろそろ寝るワ {ナ/?ネ/?ヨ/*ゾ}。

6.3.2 「ワ」が生起する文タイプ

「ワ」は平叙文にのみ生起し、その他の命令文や疑問文とは生起しない。

- (171)今日はそろそろ寝るワ。(平叙文)
- (172)*一緒に買い物行こうワ。(命令文：<勧誘>)
- (173)*はよしろワ。(命令文：<命令>)
- (174)*もう泣くなワ。(命令文：<禁止>)
- (175)*明日雨降るかワ。(真偽疑問文：<疑問>)
- (176)*いつ言ったかワ。(疑問語疑問文：<疑問>)

以上、「ワ」の形式的特徴について記述した。宇和島市の若年層が使用する「ワ」は野間純平(2011)で記述されている大阪方言の「ワ」と比較しても前接要素・後接要素に加え、生起する文タイプも平叙文のみという点で共通している。

6.3.3 「ワ」の意味機能

ここでは、「ワ」の意味機能について述べる。野間純平（2011）では大阪方言の「ワ」の基本的な意味として以下のようにまとめられているが、宇和島市方言の「ワ」とかなり類似したものだと考えられる。

ワは、

- a. 当該命題の内容が話し手がその場で考えたり知ったりしたことであり
 - b. それが話し手の領域にとどまっている
- ということを表す

（野間純平（2011））

(a) の「当該命題の内容が話し手がその場で考えたり知ったりしたこと」というのは、以下のような場面が想定される。

(177) (初めて入った店で食べたカレーが想像以上においしかったとき)

A : お、ここのカレーおいしいワ。

B : ほんとおいしいね。

(178) (学校が明日休みだということをたった今知らされたとき)

A : 台風の影響で明日は学校休みらしいよ。

B : え、明日休みなんか。知らんかったワ。

(177) は初めて行く店であるため話し手はその店の料理の味について知る由もなかったが、実際に食べてみると想像以上に美味しかったときの反応で、(178) は明日学校が休みだということをたった今知らされたときの反応である。いずれも話し手が「その場で考えたり知ったりしたこと」を発話しているのである。

一方で、(b) の「それが話し手の領域にとどまっている」とはどういうことだろうか。

(179) (外に出て雨が降っていることに気がついたときに独り言で)

あ、雨やワ。

(180) (親から勉強するようにしつこく言われたとき)

そんなに言われんでも、今からちゃんとやるワ。

(179) は話し手が外に出てみると雨が降っていることに気づいたため独り言を述べている場面である。(180) は親から何度もしつこく勉強するようにと言われたため、話し手は苛立って「何度も言われなくとも今から取り掛かるところだ」という意志を表明する場面である。このように「ワ」は必ずしも聞き手に話し手の意志や考えを導入する働きがあるわけではなく、独り言で使用したり、「そんなこと分かっている」というような聞き手を突

き放すニュアンスを付加したりできる。これらの特性をまとめて野間純平（2011）では「話し手の領域にとどまっている」とまとめているのである。

逆に、(a)・(b)に反するような場面では「ワ」を使用することはできない。

(181) (転校生に自己紹介をするとき)

私の名前は {#香織やワ／香織ヨ}。

(182) (家族に明日学校はあるのかと聞かれたとき)

明日は体育祭の振替休日だから学校は {#休みやワ／休みヨ}。

(181)・(182)はともに、話し手にとって自明な事柄である。つまり、(a)の「当該命題の内容が話し手がその場で考えたり知ったりしたこと」という要素に反している。なお、野間純平（2011）では(b)の「話し手の領域にとどまっている」についての反例を挙げることは難しいとしている。なぜなら、実際は聞き手に向かた発話であっても意図的に「ワ」を使用して、話し手の領域にとどめているように見せかける用法が可能になるからである。

ここまで野間純平（2011）による大阪方言としての「ワ」の記述を参照してきたが、宇和島市の若年層が使用する「ワ」と用法がかなり似通っていると考えられる。なお、藤原与一（1986）によると下降イントネーションになる文末詞の「ワ」は九州東部、山陰、四国、近畿、中部、東北など全国各地で確認されている。さらに、服部匡（1992）では「ワ」について、男性も女性も使用するということを表すために「汎性語」として記述している。また、日本語記述文法研究会（編）（2003）でも「ワ」について、地域差や世代差もあるが男性が用いることもあるとしている。

現代東京語における終助詞ワは、女性語とされることがある。しかしながら、既にしばしば指摘されているように、実際の口頭語では、その使用が女性に限られないワが聞かれることがある。
(服部匡（1992))

地域差や世代差もあるが、「わ」という終助詞自体は用法によっては男性が用いることもある。気づきを表すような非対話的な用法は女性だけが用いるが、聞き手からの情報による納得や、意志の表明を表す対話的な用法は男性が用いることもある。

(日本語記述文法研究会（編）（2003))

これらをもって「ワ」を共通語の文末詞とするか否かは議論の余地が残るところだが、全国的に「ワ」が普及していることにより、宇和島市でも若年層を中心に近年新たに使用されるようになったのではないかと考えられる。なお、宇和島市方言の「ワ」の意味機能については野間純平（2011）の説明から外れる部分が基本的に見当たらぬため、改めてまとめることはしない²⁰。

6.4 世代別による「ワイ」・「-a+イ」・「ワ」の使用実態

ここまで、宇和島市方言として使用される「ワイ」・「-a+イ」・「ワ」の用法について筆者の内省や先行研究を基に記述した。その結果、以下のことが明らかとなった。

【宇和島市の「ワイ」・「ワ」について明らかになったこと】

- 意向形による意志文に「ワイ」を付加する用法はほとんど使用されていない。
- 主に若年層が使用する宇和島市方言の「ワ」は大阪方言の「ワ」と用法面で重なつており、全国的に分布しているものが流入している可能性がある。

現在の宇和島市には「ワイ」・「-a+イ」・「ワ」の使用実態に世代差が生じていることが考えられるため、実態を明らかにするべく聞き取り調査を行った。以下では調査概要と調査結果を報告する。

また、本題に戻り「テヤ」の〔ずれの表明〕において、「テヤ」や「ワ」および「ワ」に関連するその他の表現形式の使用的可否についても調査した。1つ目の「ワイ」・「-a+イ」・「ワ」の使用実態を明らかにする調査を「調査 A」、2つ目の〔ずれの表明〕における使用形式の調査を「調査 B」とする。

6.4.1 調査 A の概要

調査対象は 6 歳から 12 歳までの期間を愛媛県宇和島市で過ごした人とし、若年層（20 代）10 人（男女 5 人ずつ）、高年層（60 代～90 代）10 人（男女 5 人ずつ）にそれぞれ調査した。なお、詳しい話者情報は資料編に示す。

調査時期は 2018 年 8 月から同年 10 月までである。調査項目は以下のとおりで、筆者が示す表現を使うか使わないかを口頭で尋ね、適宜その表現から感じられるニュアンスや、（使用しないと回答した場合は）どの程度違和感があるのかなどを追加で質問した。

・調査項目

(平叙文)

もうそろそろ寝るということを家族に言うとき

そろそろ {a. 寝るワイ／b. 寝ライ／c. 寝るワ}。

(意向形による意志文)

回覧板を読んでおくように家族に言われて返事をするとき

分かった。後で {読もうワイ}。

5.4.2 調査結果と考察

調査結果は表 6 のとおりである。

表 6 : 「ヤ」に関する聞き取り調査の結果

回答者	叙述	「ヤ」が生起する文タイプ				疑問文 (真偽疑問文)	命令 (否定疑問文)		
		命令文			禁止				
		勧誘	命令						
若M03	×	●	●	●	●	◇	●		
若M01	◇	●	●	●	●	◇	◇		
若M05	×	●	●	●	●	×	◇		
若M12	×	●	●	●	●	◇	◇		
若F02	×	●	●	●	●	◇	◇		
若F03	×	●	●	●	●	◇	◇		
若F05	×	●	●	●	●	◇	◇		
若F12	×	●	●	●	●	×	◇		
若M11	×	●	●	●	◇	×	◇		
若F11	×	●	●	●	◇	◇	◇		
高M11	×	●	●	●	●	●	●		
高F01	×	●	●	●	●	●	●		
高M01	×	●	●	●	●	×	●		
高M03	×	●	●	●	◇	×	●		
高M13	×	●	●	●	◇	×	●		
高F12	×	●	●	●	●	×	●		
高M12	×	●	●	●	●	◇	◇		
高F03	×	●	●	●	●	×	◇		
高F11	×	●	●	●	●	◇	◇		
高F13	×	●	●	●	●	×	◇		

<凡例>

- …問題なく使用できる
- ◇…理解できるが使用しない
- ×…使用できない

<回答者記号>

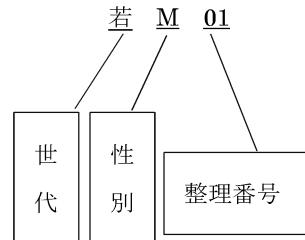


表 6 より、命令文では世代にかかわらずほぼ全員が問題なく「ヤ」を使えると回答している。<禁止>で若干名理解できるが使用しないと回答した人がいるが、これは「ヤ」の問題ではなく、いずれも「泣きさんな」という方言形の動詞を使用しないためであることを確認した¹⁶。これらのことから、「ヤ」は世代を問わず命令文で問題なく使用されていることが分かる。

一方、疑問文は<命令>については高年層で問題なく使えるとした人が一定数見られるが、若年層では理解できるが使用しないと回答した人が大半を占めた。なお、平叙文ではほぼ全員が使用できないと判断している。

5.5 「テヤ」と「ヤ」の関係性

現地調査の結果より、「ヤ」は若年層においては命令文専用の文末詞として定着しているということが分かった。それでは、「ヤ」に生じているこの現象と「テヤ」が命令文で使用しづらくなっている現象はどのように関係しているのだろうか。

「テヤ」は先述したとおり、発話の引用形式「と言やあ」に由来する文末詞であるため、「と言やあ」という形式の時点ではいずれの文タイプにおいても使用することができていた形式だと推測される。しかし、「テヤ」の文法化により徐々に発話の引用形式としての機能が希薄化し、話し手の発話態度を表す文末詞となった「テヤ」は 4 章で述べたように、平

叙文においてプロトタイプな意味用法から拡張した談話展開上の意味用法を複数獲得した。これは「テヤ」が「話し手がどのような認識を持っているか」・「それをどのように聞き手に伝達するか」という点において、表現法を豊かにしたと言える。

しかし、一般的に疑問の文脈で発話される疑問文では命題に対して話し手の判断は成立しておらず、命令文も聞き手に行行為の実行を求めたり実行されなかったときに非難したりする文タイプである。そのため、このような「テヤ」の用法変化により各文タイプの性質と「テヤ」が表現し得ることが合致しなくなり、使用に違和感が生じるようになったと考えられる。結果として、発話の引用形式としての機能が希薄化したことで疑問文では世代を問わず「テヤ」を使用しなくなり、呼びかけでの使用も現在は高年層のみに留まっている。そして、現在「テヤ」を使用できるか否か判断が揺れている命令文も上記の「テヤ」の用法変化により、使用に違和感を抱かれるようになっているのである。

さて、表 6 からは高年層の一部は命令文に加えて疑問文＜命令＞でも使用している一方で、若年層は命令文に使用が偏っていることがうかがえる。つまり、若年層においては「ヤ」が命令文専用の文末詞として定着していると言える。「テヤ」と「ヤ」は出自が異なるため、表現し得る発話意図などが必ずしも一致するわけではないが、「ヤ」が「テヤ」と代替可能な形式として定着していることは「3.4 「テヤ」が生起する文タイプに関するアンケート調査」で示した調査結果（図 3・図 4・図 5・図 6）で命令文において「テヤ」ではなく「ヤ」を使用する割合が全世代で高かったことからも指摘できる。

したがって、若年層において「テヤ」が命令文で使用できなくなるという現象は代替可能な形式としての「ヤ」の定着により、「テヤ」の通時的な変化に拍車をかけたものと考えられる。その結果、とりわけ若年層において命令文では「ヤ」を、平叙文では「テヤ」を使用するという棲み分けがなされるようになったのである。言い換えると、「テヤ」の通時的な変化は「ヤ」のような代替可能な形式があったからこそ起こった変化であり、代替可能な形式が存在しないような状況で突然変化するということは考えにくい。

5.6 5章のまとめ

5章では「テヤ」の命令文における世代差の要因の1つとして、「ヤ」が命令文専用の形式として定着したことが間接的に影響しているということを述べた。ただし、繰り返しになるが、「テヤ」が命令文で使用されなくなっていることの直接の原因が「ヤ」であるということを主張しているわけではない。

あくまでも、「テヤ」が発話の引用形式から話し手の発話態度を表す文末詞へと変化したことで、これまで生起していた平叙文以外の文タイプと「テヤ」の性質とが合致しなくなったことが直接的な原因である。つまり、「ヤ」が命令文専用の文末詞として定着したことで、「テヤ」が平叙文専用の文末詞へと変化しても、命令文において代替可能な形式が存在することになり、「テヤ」の用法変化が促進されたと考えられるのである。

【宇和島市の高年層の様相】

もともと宇和島市方言として存在していた意向形による意志文に生起する「ワイ」は消失しつつあり、平叙文に生起する「ワイ」は前接語との融合によって生じる「-a+イ」という形式に一本化されている。なお、「ワ」は獲得していない。

【宇和島市の若年層の様相】

もともと宇和島市方言として存在していた意向形による意志文に生起する「ワイ」は消失しつつあり、平叙文に生起する「ワイ」は前接語との融合によって生じる「-a+イ」という形式が広く使用されている。そして新たに「ワ」という文末詞を獲得したことで、平叙文に生起する音融合しない「ワイ」も許容されるようになった。ただし、かつての宇和島市方言の「ワイ」が復活したのではなく、既存の形式を「ワ」の用法に当てはめて新たに取り入れたものだと考えられる。

6.4.4 調査Bの概要

調査Bにおけるインフォーマントおよび調査時期・調査方法は調査Aと同じである。調査項目は〔ずれの表明〕において使用されると筆者が想定した表現形式を下記のとおり設定した。

- ・調査項目

- 〔ずれの表明〕

- (家族の中でご飯を3杯も食べる人を見たとき)

- よーそんだけ {a. 食べるヨ／b. 食べラヤ／c. 食ベライ／d. 食べるワイ／e. 食べるワ／f. 食べるテヤ}。

6.4.5 調査Bの結果と考察

調査Bの結果は次頁の表8のとおりである。「-a+イ」を使用した「食べライ」が全世代で安定して使用されているほか、「食べるテヤ」は高年層に、「食べるワイ」および「食べるワ」は若年層に偏る傾向が見られた。ただし、若年層も「食べるテヤ」を使用できないとした人は少なく、理解できるが使用しないという人が大半である。このことから、〔ずれの表明〕は「テヤ」の用法変化（通時的な変化）により使用されなくなったわけではないということが分かる。「4.3.2 調査結果と考察」の表4と比較しても、〔ずれの表明〕で「テヤ」を使用するか否かには個人差がある状態だと考えるのが妥当である²²。

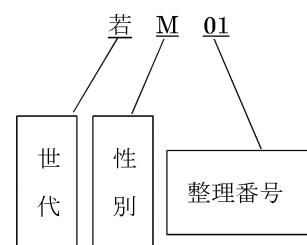
なお、「食べるヨ」は一定数使用する人もいたが、共通語的であるため使用しないと回答した人が多かった。また、「-a+イ」と同様に、前接語に「-a+ヤ」を付加して音融合を起こす形式を使用した「食べラヤ」は高年層男性的な表現であるという意識を持つ人が多く、使用はやはり高年層男性に限定されていた。

表 8：調査 B で行った聞き取り調査の結果

回答者	[ずれの表明]で使用する形式					
	(a) 食べるヨ	(b) 食ベラヤ	(c) 食ベライ	(d) 食べるワイ	(e) 食べるワ	(f) 食べるテヤ
若M03	●	●	●	●	●	●
若F11	●	◇	●	●	●	◇
若M01	◇	◇	●	●	●	◇
若F02	◇	◇	●	●	●	◇
若F03	◇	◇	●	●	●	◇
若M05	●	◇	●	◇	●	◇
若F05	●	x	●	◇	●	◇
若M12	▽	◇	●	▽	●	◇
若M11	x	x	◇	x	●	x
若F12	◇	x	●	●	◇	●
高M01	x	●	●	x	x	●
高M03	◇	●	●	◇	x	●
高M12	x	●	●	◇	x	●
高F11	●	◇	●	●	◇	●
高F01	◇	◇	●	◇	x	●
高F13	●	◇	●	◇	x	●
高M13	◇	◇	●	◇	◇	●
高M11	x	x	●	x	x	●
高F03	●	◇	◇	x	◇	◇
高F12	◇	◇	◇	◇	◇	◇

<凡例>
 ●…問題なく使用できる
 ◇…理解できるが使用しない
 ▽…使用できるか迷う
 x…使用できない

<回答者記号>



6.5 「テヤ」と「ワイ」・「-a+イ」・「ワ」の関係性

表 8 より、[ずれの表明] では若年層が「テヤ」の代わりに「ワイ」・「-a+イ」・「ワ」を使用する傾向が確認できた。[ずれの表明] は「4.2.5 プロトタイプな意味用法と拡張した意味用法の関係性」で述べたとおり、「テヤ」のプロトタイプな意味用法から最も拡張した意味用法であるため、その他の意味用法と比べて「テヤ」を使用する必然性が低く、文脈を逸脱しない範囲で他の文末詞を使用しても許容されやすい意味用法だと考えられる。そのような状況で若年層は「ワ」(および「ワイ」)を受容し「テヤ」との競合が起こったため、高年層と比較して「テヤ」を使用する人が少ない。一方で高年層は「ワ」(および「ワイ」)を受容していないため「テヤ」との競合が起きず、若年層よりも「テヤ」を使用する人が多いのである。ただし、[ずれの表明] は「テヤ」の拡張した意味用法であるため、高年層においても「テヤ」の意味用法として獲得しているか否かには個人差がある。

つまり、[ずれの表明] は高年層の方がやや使用者が多いため、一見すると「テヤ」の通時的な変化により世代差が生じているように見えるが、若年層が理解できる水準を保っていることからも分かるように、「テヤ」以外の文末詞を受容するか否かによって使用する文末詞が競合する世代と競合しない世代とに分かれたことで起こった現象であると言える。

ここで、調査 B の結果についていくつか触れておきたいことがある。まず、「-a+イ」と「テヤ」が共存していることについてである。同じ [ずれの表明] で使用されるならば、どちらかの形式に統一されても良さそうなものだが、なぜ両者は共存し得るのだろうか。それは、[ずれの表明] が「テヤ」にとって最も拡張した意味用法であることと関係している。[ずれの表明] は「テヤ」にとってまだ新しい用法であるため、既存の方言形式である「-a

「-a+イ」もすぐに使用されなくなるのではなく、共存状態が続いていると考えられる。つまり、「テヤ」の談話展開上の意味用法のうち「[ずれの表明]」を獲得している人はそのまま「テヤ」を使用すれば良いのだが、まだ「[ずれの表明]」を獲得していない人も世代を問わず一定数いる。そのような状況で伝統的な宇和島市方言である「-a+イ」をすぐに排除してしまっては、コミュニケーションに支障をきたしてしまう。以上の理由により、「-a+イ」と「テヤ」は共存し得るのである。

また、若年層において「-a+イ」と「ワ」（および「ワイ」）が共存し得る理由も考えておこう。先述したとおり、「-a+イ」は「テヤ」の談話展開上の意味用法として「[ずれの表明]」を獲得していない高年層にとっては欠かすことのできない表現形式である。若年層と異なり高年層は「ワ」（および「ワイ」）を獲得していないため、若年層が「[ずれの表明]」で「テヤ」を使用しない高年層とコミュニケーションをとる際は「-a+イ」を使用することが考えられる。そのため、若年層にとっても「-a+イ」はなくてはならない表現形式なのである。

さらに、若年層において「ワ」と「ワイ」が共存し得る理由についても説明する。「6.4.3 「ワイ」・「-a+イ」・「ワ」の関係性」で述べたように、若年層が使用する「ワイ」は「ワ」の受容およびその用法面から考えて、伝統的な宇和島市方言が復活したのではなく、既存の形式を「ワ」の用法に当てはめて新たに獲得された文末詞であると考えるのが妥当である。そして、「ワ」と「ワイ」は独り言で使用できるか否か、すなわち聞き手目当て性の有無という点で差異がある。そのため、若年層においては「ワイ」・「-a+イ」・「ワ」という3形式が共存しているのである。

6.6 6章のまとめ

6章では「テヤ」の談話展開上の意味用法のうち「[ずれの表明]」における世代差の要因について考察した。「[ずれの表明]」に生じる世代差は一見すると、高年層に使用者が多く、若年層では使用者が少ないため、「テヤ」の通時的な変化により生じたもののように見える。しかし、「[ずれの表明]」は「テヤ」のプロトタイプな意味用法から最も拡張した意味用法であり、高年層でも使用できるか否かには個人差があるという状況だと考えられる。

ではこの世代差の要因は何かと言うと、若年層で新たに「ワ」という文末詞を受容したことで「[ずれの表明]」において「テヤ」と「ワ」の競合が起こり、高年層では「ワ」を受容していないがために競合が起こっていない状態にある、すなわち若年層よりも相対的に「テヤ」を使用できる環境にあるということであった。また、高年層においても「[ずれの表明]」で「テヤ」を使用できない人が一定数いるため、既存の「-a+イ」がすぐに排除されることもなく複数の表現形式が共存している状態なのである。

第7章 まとめと今後の展望

以上、「テヤ」の用法と一部の用法に生じる世代差の要因を中心に愛媛県宇和島市で使用される方言文末詞について記述してきた。これまで述べてきたことを簡単に振り返る。

「テヤ」には現在3つの世代差が生じている。1つ目は命令文において、2つ目は「[ずれの表明]」において、3つ目は呼びかけにおいてそれぞれ「テヤ」を使用するか否かである。いずれの用法も高年層は「テヤ」を使用しているのに対し、若年層では使用する割合が少なくなっている。命令文と呼びかけにおける世代差の直接的な要因は「テヤ」の文法化である。先行研究の記述により、「テヤ」は発話の引用形式「と言やあ」に由来し、当初は文中でも使用することができる形式だったと推測される。しかし、文法化が起り主文末でのみ使用されるようになったことで、徐々に発話の引用形式としての機能が希薄化し、話し手の発話態度を表す文末詞へと変化していった。そうして徐々にプロトタイプな意味用法から拡張した談話展開上の意味用法も獲得するようになった「テヤ」は平叙文では現在でも頻繁に使用されているが、命令文や呼びかけでは使用しづらくなったのである。特に命令文における変化には、同じ宇和島市方言の文末詞「ヤ」が命令文専用の文末詞として定着していることが関係している。「ヤ」が命令文で使用されていた「テヤ」の代替形式という役割を統語的に、そして文脈的に担える文末詞であったため、「テヤ」の用法変化（通時的な変化）が促進されたと考えられる。

また、「[ずれの表明]」については、若年層と高年層とで「テヤ」の使用の可否に世代差があるため、「テヤ」の用法変化による世代差にも見える。しかし、本稿ではこの世代差を「テヤ」の用法変化によるものだとは見ない。世代差の要因として考えられることは、若年層において新たに「ワ」という文末詞を受容したことが関係している。若年層では「ワ」を新たに受容したこと、「[ずれの表明]」において「テヤ」と「ワ」が競合する状況になったために「テヤ」が使用されなくなったのである。一方、高年層では「ワ」を受容していないために、相対的に見て若年層よりも「テヤ」を使用することができるという状況であると考えられる。しかし、「[ずれの表明]」は「テヤ」のプロトタイプな意味用法から最も拡張した意味用法であるため、高年層においても「[ずれの表明]」で「テヤ」を使用できるか否かには個人差が生じている。すなわち、あくまでも若年層では「[ずれの表明]」で「テヤ」と競合する形式があるために「テヤ」の使用率が高年層と比べて低いのであって、「テヤ」の通時的な変化によって生じた現象ではないのである。その証拠に聞き取り調査の結果を見ても、「[ずれの表明]」で使用される「テヤ」を使用できないと判断する若年層は限定期である。

以上が本稿で述べた「テヤ」の用法変化のあらましである。一連の現象から方言文末詞の用法変化が生じる要因として、以下のことが導き出せる。

【方言文末詞の用法変化が生じる要因】

ある方言文末詞の用法が時間の経過とともに変化するとしても、変化は突然生じるのではなく、当該用法を担える代替可能な形式が存在している場合に変化が生じることがある。

冒頭で述べたとおり、共通語化の影響で同一地域内であっても使用される言語に世代差がある場合がある。しかし、本稿で記述してきたように特定の方言文末詞が使用されなくなったと言っても、それは必ずしも共通語に置き換えられるばかりではない。既存の方言文末詞あるいはその他の方言文末詞の影響、さらには共通語を含めた新たな文末詞の受容などの要因が複雑に絡み合った結果、表現形式は変化するのである。

井上優（2006）で指摘されているように²³、文末詞の意味記述のための道具立てはいまだ十分に整備されているとは言えない状況である。本稿では、主に筆者の内省に基づいて方言文末詞の意味記述を行った。併せて現地調査を行ったことで、同一地域に生じている世代差を実証可能な形で明らかにすることができた。調査の話者数や世代差の要因の考察部分についてはまだまだ検討すべき課題も多いが、本稿がこれからの方言文末詞の記述方法を考える上でのたたき台になるようあれば幸いである。

最後に、本研究の今後の展望について述べる。本稿では発話の引用形式に由来する文末詞「テヤ」に焦点を当て、その用法や一部の用法に生じる世代差の要因について論じてきた。一方で、山形市方言の「ズ」や山口方言の「チャ」なども発話の引用形式に由来する文末詞で、「テヤ」と共通する意味用法も複数確認できる²⁴。今後、これらとの比較対照を行うことでそれぞれの文末詞の特徴をより明らかにできると考えられる。さらに、「テヤ」と同様の用法変化を他地域の方言文末詞でも確認することができれば、発話の引用形式に由来する文末詞の用法変化に一定の法則のようなものを抽出することができるかもしれない。仮に「テヤ」に見られたような世代差が他地域の方言にもあるのならば、本稿で述べたように同一地域内の文末詞が代替形式として使用されているのか、あるいは共通語と置換されているのかという点に注目して人々の言語使用意識などを分析するような研究につながる可能性もあるだろう。

資料編

「3.4 「テヤ」が生起する文タイプに関するアンケート調査」で行った現地調査について、本稿で触れられなかった調査項目および調査結果を以下に示す。使用形式に応じて若干の差異はあるが、本稿の主張に影響を及ぼすものではない。

・調査項目

(平叙文：動詞の過去形)

親から昨日塾に行ったのかと何度もしつこく聞かれて答えるとき（若年層）

家族から昨日リハビリに行ったのかと何度も聞かれて答えるとき（中年層・高年層）

a.行ったヨ／b.行ったテヤ。

(命令形による命令文：<命令>)

時間になんでも食べ終わらない友人を催促するとき（共通）

はよ {a.食べろヤ／b.食べろテヤ}。

(命令形による命令文：<命令>)

時間になんでも食べ終わらない友人を催促するとき（共通）

はよ {a.食べ一ヤ／b.食べ一テヤ}。

(禁止形による命令文：<禁止>)

何度も慰めているのに泣き続ける友人に声をかけるとき（共通）

分かったけん、もう {a.泣くなヤ／b.泣くなテヤ}。

(不可能形による命令文：<禁止>)

何度も慰めているのに泣き続ける友人に声をかけるとき（共通）

分かったけん、もう {a.泣かれんヨ／b.泣かれんテヤ}。

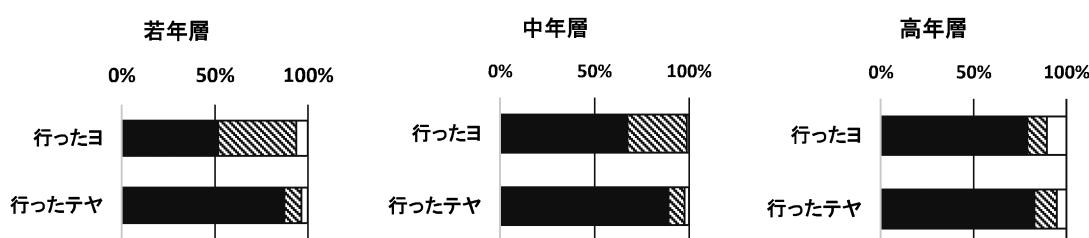


図 7：平叙文「行った」の世代差

■言う ▨言わないがおかしくない □言わないしおかしい

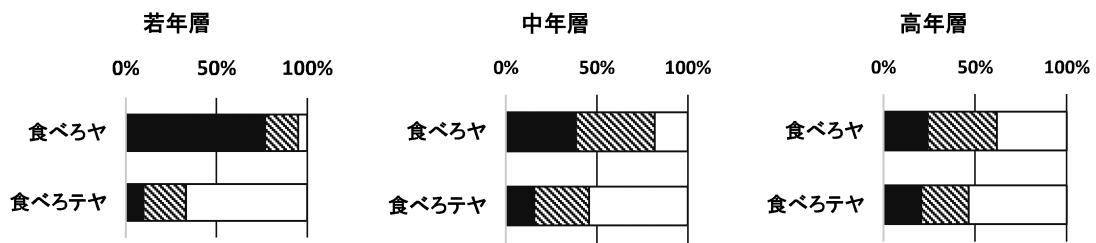


図 8：命令文<命令> 「食べろ」 の世代差

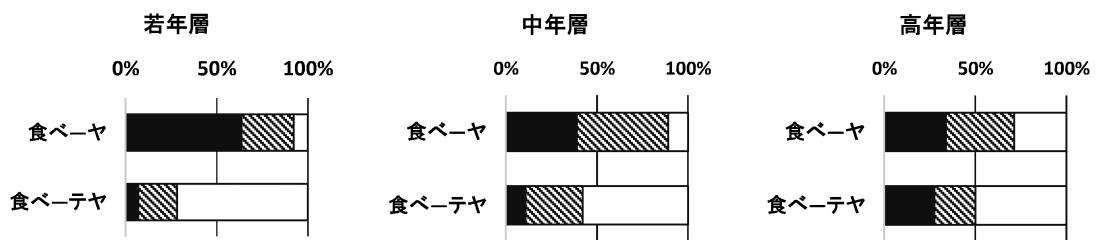


図 9：命令文<命令> 「食べー」 の世代差

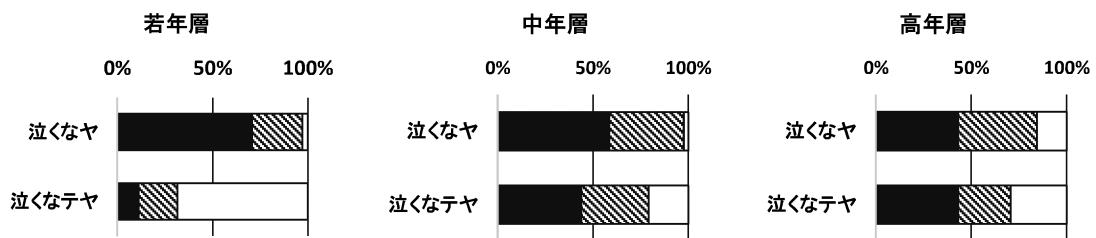


図 10：命令文<禁止> 「泣くな」 の世代差

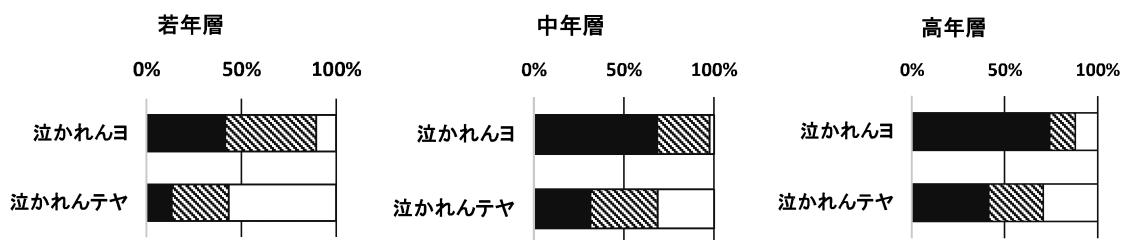


図 11：命令文<禁止> 「泣かれん」 の世代差

■ 言う □ 言わないがおかしくない □ 言わないしおかしい

また、4章・5章・6章で行った聞き取り調査の話者情報を下記のとおり示す。

表 9：話者情報一覧

回答者記号	生年	性別	出身地	外住歴（3年以上の地域のみ）	調査年
若 M01	1997	男性	宇和島市		2017・2018
若 M02	1994	男性	宇和島市	東京都新宿区（18歳～）	2017
若 M03	1994	男性	宇和島市	山梨県都留市（18歳～22歳頃）	2017・2018
若 M04	1994	男性	宇和島市	香川県高松市（18歳～22歳頃）	2017
若 M05	1995	男性	宇和島市		2017・2018
若 M11	1997	男性	宇和島市		2018
若 M12	1997	男性	宇和島市		2018
若 F01	1996	女性	宇和島市		2017
若 F02	1994	女性	宇和島市	広島県広島市（18歳～22歳頃）	2017・2018
若 F03	1994	女性	宇和島市	広島県東広島市（18歳～22歳頃）	2017・2018
若 F04	1994	女性	宇和島市	香川県高松市（18歳～22歳頃）	2017
若 F05	1994	女性	宇和島市	愛媛県東温市（18歳～）	2017・2018
若 F011	1995	女性	宇和島市	兵庫県尼崎市（0歳～5歳頃）	2018
若 F012	1988	女性	宇和島市	岡山県倉敷市（19歳～24歳頃）	2018
高 M01	1948	男性	宇和島市	大阪府此花区（18歳～23歳頃）	2017・2018
高 M02	1942	男性	宇和島市		2017
高 M03	1933	男性	宇和島市		2017・2018
高 M04	1949	男性	宇和島市	兵庫県姫路市（40歳～）	2017
高 M05	1949	男性	宇和島市	大阪府（24歳～31歳頃）	2017
高 M11	1951	男性	宇和島市		2018
高 M12	1937	男性	宇和島市	東京都江戸川区（18歳～24歳頃）	2018
高 M13	1928	男性	宇和島市	愛媛県愛南町（20歳～30歳頃）	2018
高 F01	1948	女性	宇和島市		2017・2018
高 F02	1942	女性	宇和島市		2017
高 F03	1937	女性	宇和島市		2017・2018
高 F04	1932	女性	宇和島市		2017
高 F05	1930	女性	宇和島市		2017
高 F11	1940	女性	宇和島市		2018
高 F12	1933	女性	宇和島市		2018
高 F13	1932	女性	宇和島市		2018

参考文献

- 井上優 (1993) 「発話における「タイミング考慮」と「矛盾考慮」—命令文・依頼文を例に—」『研究報告集』14、pp.333-360、国立国語研究所
- (1995) 「方言終助詞の意味分析—富山県砺波方言の「ヤ／マ」「チャ／ワ」—」『研究報告集』16、pp.161-184、国立国語研究所
- (2006) 「第4章 モダリティ」小林隆・佐々木冠・渋谷勝己・工藤真由美・井上優・日高水穂『シリーズ方言学2 方言の文法』、pp.137-179、岩波書店
- 上野智子 (2011) 「第3章 言いはなつ」『四国方言—とりたて・言いよどみ・言いはなち・言いすてて・言いおさめる—』、pp.191-239、リーブル出版
- 加藤淳 (2010) 「「発話場面」における終助詞「か」の意味機能」『名古屋大学人文科学研究』39、pp.27-40、名古屋大学大学院文学研究科
- 金水敏・田窪行則 (1997) 「談話管理理論に基づく「よ」「ね」「よね」の研究」『音声による人間と機械の対話』、pp.257-271、オーム社
- 工藤真由美 (2014) 『現代日本語ムード・テンス・アスペクト論』ひつじ書房
- 工藤真由美・八亀裕美 (2008) 『複数の日本語—方言からはじめる言語学—』講談社選書メチエ
- 国村三郎 (1956) 『宇和島語法大略』宇和島市立図書館
- 久門正雄 (1960) 『国語拾遺語原考—愛媛新居方言精典—』新紀元社
- 小西いずみ (2016) 「対照方言学的研究のこれまでとこれから」日本方言研究会（編）『方言の研究』2、pp.99-115、ひつじ書房
- 小畠裕将 (2016) 「岡山市方言における終助詞「デ」」『広島大学大学院教育学研究科紀要』65、pp.119-128、広島大学大学院教育学研究科
- 篠崎充男 (1987) 『宇和島の方言一話と語彙一』自費出版
- 芝田卓哉 (2008) 「岐阜市方言の文末詞「テ」」『阪大社会言語学研究ノート』8、pp.46-54、大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室
- 渋谷勝己 (2000) 「山形市方言における文末詞ズ」『阪大社会言語学研究ノート』2、pp.8-17、大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室
- (2012) 「山形市方言の文末詞ヤ—ヨと対比して—」『阪大社会言語学研究ノート』10、pp.78-88、大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室
- (2016) 「山形市方言の文末詞の相互承接」『阪大日本語研究』28、pp.1-21、大阪大学大学院文学研究科日本語学講座
- 白岩広行・平塚雄亮・酒井雅史 (2016) 「繁辞生起の方言差」『日本語文法』16-2、pp.94-110、くろしお出版
- 陣内正敬・友定賢治（編）(2005) 『関西方言の広がりとコミュニケーションの行方』和泉書院
- 杉山正世 (1959) 「愛媛県 宇和島市」国立国語研究所（編）『国立国語研究所報告 16 日本方言の記述的研究』、pp.217-238、明治書院
- (1964) 「愛媛県の方言区画」日本方言研究会（編）『日本の方言区画』、pp.446-458、東京堂出版
- 高橋顯志 (1992) 「愛媛県方言」平山輝男・大島一郎・大野眞男・久野眞・久野マリ子・杉村孝夫（編）『現

- 代日本語方言大辞典』1、pp.252-257、明治書院
- 武智正人（1957）『愛媛の方言：語法と語彙』愛媛大学地域社会総合研究所
- 辻加代子（2001）「東京方言「ッテ」と「ッテバ」の用法について—文末詞的用法を中心に—」『阪大社会言語学研究ノート』3、pp.77-93、大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室
- 坪内佐智世（1995）「福岡市博多方言の不変化詞タイ・バイの意味記述」『九大言語学研究室報告』16、pp.75-103、九州大学文学部言語学研究室
- 日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部（編）（2001）『日本国語大辞典 第二版』小学館
- 日本語記述文法研究会（編）（2003）『現代日本語文法4 第8部 モダリティ』くろしお出版
- 野田春美（2002）「第8章 終助詞の機能」宮崎和人・安達太郎・野田春美・高梨信乃『新日本語文法選書4 モダリティ』、pp.261-288、くろしお出版
- 藤田保幸（1999）「引用構文の構造」『国語学』198、pp.1-15、国語学会（日本語学会）
- 船木礼子（1999）「山口方言の文末詞「イネ」について」『阪大社会言語学研究ノート』1、pp.53-60、大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室
- （2000a）「山口方言の文末詞チャ」『阪大社会言語学研究ノート』2、pp.25-34、大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室
- （2000b）「引用表現形式に由来する文末詞の対照—山形市方言ズ、山口方言チャ、東京方言ッテ・ッテバについて—」『阪大社会言語学研究ノート』2、pp.35-46、大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室
- （2001）「山口方言の文末にみられるジャについて—断定辞のジャと文末詞のジャ—」『阪大社会言語学研究ノート』3、pp.94-109、大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室
- 野間純平（2011）「大阪方言の文末詞デとワ」『阪大社会言語学研究ノート』9、pp.30-45、大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室
- （2012）「大阪方言における「イ」の機能—文末詞「ワイ」「カイ」の意味にもとづいて—」『阪大社会言語学研究ノート』10、pp.55-65、大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室
- 蓮沼昭子（1997）「終助詞「よ」の談話機能—その2—」『日本語教育論文集—小出詞子先生退職記念—』、pp.581-599、凡人社
- 服部匡（1992）「汎性語の終助詞ワについて」『同志社女子大学学術研究年報』43-4、pp.267-281、同志社女子大学
- 藤原与一（1982）『昭和日本語方言の総合的研究第三巻 方言文末詞<文末助詞>の研究（上）』春陽堂書店
- （1986）『昭和日本語方言の総合的研究第三巻 方言文末詞<文末助詞>の研究（下）』春陽堂書店
- （1997）『日本語方言辞書—昭和・平成の生活語— 下巻』東京堂出版
- 吉田町・吉田町教育委員会（1983）『やどんもりーふるさと歳時記ー』岡田印刷

本稿では上記の参考文献に加えて、宇和島市の談話データとして国立国語研究所が所蔵する「各地方言収集緊急調査」（38e 愛媛県宇和島市）の原資料を使用した。

注

¹ 1994年生まれの男性。0歳～18歳は愛媛県宇和島市に、18歳以降は大阪府吹田市に在住。

² 例えば井上優（1993、1995、2006ほか多数）、渋谷勝己（2000、2004、2016ほか多数）などが挙げられる。井上優氏は富山県南砺市井波方言を、渋谷勝己氏は山形県山形市方言の文末詞を文法的・文脈的な観点から詳細に記述している。本研究も両氏の記述方法を参考にした部分が多い。

³ 「ってば」について、辻加代子（2001）では「文末詞的」とし、日本語記述文法研究会（編）（2003）では「終助詞相当の形式」としている。

⁴ なお、参照した先行研究には文末詞（終助詞）として掲載されているものでも、実際は他品詞に属すると思われるものや複合文末詞（「ゾヨ」など）だと思われるものは表に含めていない。また、表1として掲載したものが全ての宇和島市の方言文末詞を網羅できているわけではなく、少なくともこれだけあるということを示すものに過ぎない。

⁵ ただし、聞き手が知る由のないことでもノダ形式の「ン」が前接した「ンテヤ」という形式なら、使用することができる。しかし、「ンテヤ」はノダ形式が付加していることから「テヤ」が単体で使用される場合とは区別して考える必要がある。本稿では単体で使用される「テヤ」の振る舞いについて記述するため、「ンテヤ」の記述については今後の課題とする。

⁶ ただし、疑問の文脈をとる疑問語疑問文では「カ」を付加すると文法的にやや違和感がある。一方で、丁寧体に付加する際は疑問の文脈でも問題なく使用できるという特徴がある。

（地域の運動会の日がいつか尋ねるとき）

今年の運動会、いつ {φ／??カ}。

今年の運動会、いつです {φ／カ}。

⁷ 「I-領域」は金水敏・田窪行則（1997）で設定された用語で、「相手および自分の発話の内容やその場での計算によって算出される知識などの、概念的知識を格納する」とされている。なお、「I」は「intensional および indirect の訳語」とされている。

⁸ 工藤真由美・八亀裕美（2008）では宇和島市方言が疑問文において「下降調が普通」とし、「イントネーションに頼らなくてもいい方言」とされている。それは、主文末で断定する場合、工藤真由美・八亀裕美（2008）では「断定専用形」とされ、本稿では「-a+イ」としている形式を使用する、あるいは「終助詞（ぜ、よ、で）が伴う」ため形式の上で疑問文か否かの区別がつくからである、と説明されている。

⁹ 野間純平（2011）によると、大阪方言の「デ」は平叙文専用の文末詞で命令文＜勧誘＞には付加しないため、生起する文タイプという点で宇和島市方言の「デ」（「ゼ」）とは異なっている。また、小畠裕将（2016）は岡山市方言の「デ」についてイントネーションの上下という観点も取り入れて詳細な分析を行っている。宇和島市方言の「デ」（「ゼ」）と一致する記述内容が多数見られるのだが、岡山市方言の「デ」が独り言で使用できるのに対して、宇和島市方言は独り言で「デ」を使用することかなり不自然に感じられるため、両者は完全に一致するというわけではない。

¹⁰ 「ものだわい」の意味で挙げられている用法についても「ってば」と置換することができないが、これは「4.2「テヤ」の談話展開上の意味用法」で述べる「テヤ」の拡張した意味用法である〔ずれの表明〕の用例であると思われる。

¹¹ ただし、伝統的な宇和島市方言では形容動詞の終止形は「な」になるとされている。国村三郎（1956）では「テヤ」の用例として「キレイナテヤ。」（いや美しいよ。）が挙げられており、若年層が使用する形式とは「テヤ」の振る舞いが若干異なっている。

¹² 本文で述べたとおり〔ずれの表明〕は話し手が意外な出来事に直面して生じた感情を詠嘆的に表明する

意味用法であるため、聞き手の存在は必須ではない。そのため、および<C>の要素を含むとは言えないものである。

¹³ 「イク トコガ アリヤ セナ ヤ。」は「-a+ヤ」の用例である。また、「コレワ オイシ ヤー。」は宇和島市方言では形容詞の語幹に「ヤ」を付加して詠嘆する用法があり、それに該当すると思われる（上野智子（2011））。なお、「オゴラレト ヤー」・「ドー イタシマシテ ヤ」については筆者自身も耳にしない用法であるため、何の用例か断定することは難しい。前者については、武智正人（1957）に「トイヤ」（トイ（と言う）ヤ（呼びかけ））とされる表現形式が見られ、それが縮約されたものではないかと思われる。後者については、コピュラあるいは単に聞き手に向けた発話であることを示すマーカーとして使用されたものではないかと考えられるが、現段階では判断を保留しておく。

¹⁴ 筆者の内省では<勧誘>において「ヤ」は問題なく使用できるが、共通語の「よ↑」は<勧誘>では文脈にかかわらず不自然である（井上優（1993）・蓮沼昭子（1997））。この点も「よ」（「ヨ」）と「ヤ」は振る舞いが異なっている。

¹⁵ 本稿では筆者の内省に基づいて「ヤ」の意味記述を行っているため、筆者が使用しない用法も十分に見渡した後に、「ヤ」の意味機能を再検討する必要があると思われる。上野智子（2011）で記述されている形容詞の語幹に「ヤ」を付加して詠嘆する用法の場合、聞き手は必要なく独り言として「ヤ」を使用することができます。

東京の人には、ちと辛ヤの。

暑ヤ暑ヤ、とても家の中にはおれんぞヤ。（いずれも上野智子（2011））

¹⁶ 「泣きさんな」を使用しない話者は「泣くな」や「泣かれん」など別の禁止形を使用することが考えられる。ただし、「泣くな」はやや男性的な表現である。また、「泣かれん」は伝統的な宇和島市方言だが、不可能形を用いた表現形式で平叙文であるため、「ヤ」が使用不可能となる。そのため、今回は「泣きさんな」を調査項目として設定した。

¹⁷ 野田春美（2002）、日本語記述文法研究会（編）（2003）の記述を参照した。

¹⁸ 広島大学大学院生の久保博雅氏。

¹⁹ 野間純平（2012）によると、大阪方言の「ワイ」が使える状況は「突き放し」のニュアンスを伴う場合」としている。しかし、宇和島市方言では（157）・（158）などのように聞き手を突き放すとは言えない状況でも「ワイ」および「-a+イ」を使用することができ、両者の意味機能は完全に一致するわけではないようである。

²⁰ ただし、大阪方言の「ワ」と宇和島市方言の「ワ」が完全に一致するとは言い切れない。近畿方言の例を用いて記述している服部匡（1992）では以下のように丁寧体に付加した「ワ」の用例が複数見られる。一方、宇和島市方言としての「ワ」は丁寧体に付加して使用されることはない。

ビデオの調子がおかしいんですワ。

あれが私の家ですワ。

²¹ 聞き取り調査で高年層話者の多くが終止形と生起して前接語との融合が起こらない「寝るワイ」という表現（杉山正世（1959）でいう②の用法）を使用できないと判断したことも、かつての宇和島市方言の「ワイ」が復活したとは考えづらい要因の1つである。

²² 表4の〔ずれの表明〕の結果と比べて「食べるテヤ」を使用すると回答した人が多くなっているが、話者が一部異なるために生じた個人差であると考えられる。話者が異なる理由は、「平成30年7月豪雨」の被災状況を考慮したためである。

²³ 井上優（2006）は、船木礼子（1999）による山口方言の「イネ」と坪内佐智世（1995）による博多方

言の「タイ」の意味記述でいずれも「話し手にとっての既定事項の提示」という種的一般化がなされている一方、両者の用法が完全に一致するわけではないことを指摘する。問題の打開策として井上優（2006）では、「終助詞の文法的性質、使用可能な文脈、使用によって生ずるニュアンスなど、分析者以外の第三者が終助詞の意味について考える手がかりをできるだけ多く記述しておくことが重要である」と述べている。本稿で用いた、筆者の内省記述と現地調査の併用という記述法はこの問題の打開策となる可能性がある。²⁴ 山形市方言の「ズ」については渋谷勝己（2000）、山口方言の「チャ」については船木礼子（2000a、2000b）をそれぞれ参照した。

付記

本稿の3章、4章、6章部分は既に研究会で発表したものや論文としてまとめているものを大幅にあるいは一部加筆修正した上で、まとめなおしたものです。該当箇所の元になった記述は以下のとおりです。

- 3章：中川寛之（2018）「愛媛県南予地方の方言文末詞「テヤ」と共起する文タイプ」『国文学』102、
関西大学国文学会
- 4章：中川寛之（2018）「愛媛県南予地方の方言文末詞「テヤ」の用法一世代差比較を中心に—」『日本方言研究会第106回研究発表会発表原稿集』日本方言研究会
- 6章：中川寛之（2019）「愛媛県宇和島市の方言文末詞「ワ」・「ワイ」」『国文学』103、関西大学国文学会

本稿では国立国語研究所が所蔵する「各地方言収集緊急調査」の原資料（愛媛県宇和島市）を使用しました。資料の使用を快諾してくださった国立国語研究所の井上文子氏に感謝を申し上げます。

本研究を進めるにあたり、お忙しい中快くアンケート調査・聞き取り調査に協力してくださった現地の方々に心から感謝の気持ちと御礼を申し上げます。「平成30年7月豪雨」により、愛媛県宇和島市にも甚大な被害が発生しました。本研究は、被災直後にもかかわらず現地の方々が調査に協力してくださったことで、また惜しみない励ましのお言葉をかけてくださったことでここまで発展させることができました。被災された方々に心よりお見舞いを申し上げるとともに、本研究に協力してくださった全ての方々に本稿を捧げます。